電気通信大学紀要24巻1号 pp77-109（2012）〔研究資料〕

中世ロシア文学図書館(III)
中世ロシアの説教①／非業に斃れた公たち

三　浦　清　美

The Medieval Russian Library (III)
Medieval Russian Preach / Tragically Killed Princes

Kiyoharu MIURA

Abstract

The author in this bulletin provides translations and commentaries of four literary works supposed to have been created in various times of medieval Russia.

These translations have two different orientations. One of them is that of medieval Russian preaching and we will treat here "The Preach of the metropolitan Hiralion on the Law and the Grace", supposed to have been written in the middle of the 11th century in Kiev as the first literary work in the history of Russian literature.

The other orientation is that of Russian orthodox legends about the tragically killed princes and we treat here "The legend of saint Vaclav", "The chronicle tale of the murder of Andrei Bogoliubsky" and "The legend of Michail Jaroslavich of Tver' ". This literary tradition began in the latter part of the 11th century with the tales about Boris and Gleb, which we have translated in the precedent number of this bulletin.

『中世ロシア文学図書館　III』は、（1）『府主教イラリオンの律法と恩寵にかんする講話』、（2）『聖ヴャチェスラフ伝』、（3）『アンドレイ・ボゴリュプスキイ公殺害の物語』、（4）『トヴェーリ公ミハイル・ヤロスラヴィチ伝』を扱う。一回分の掲載に適する分量の関係で、本稿は二つの異なるテーマの系列を合わせている。まず一つは、ロシアが最初に生み出した独自の作品、『府主教イラリオンの律法と恩寵にかんする講話』である。この作品は、中世ロシアでもっとも隆盛したジャンルのひとつである説教の代表的な傑作である。もう一つは、非業に斃れ、のちに列聖された政治指導者の聖者伝で、殉教者聖ボリスと聖グレープをあつかった前号『中世ロシア文学図書館　II』の姉妹編にあたる。

前者『律法と恩寵にかんする講話』は、2011年度前期に東京外国語大学でおこなった「中世ロシア文学研究」の授業で、修士課程大学院生、笹山啓君、原真咲君とともに講読したものである。両君とも現代ロシア文学を専攻するが、難しい中世ロシア語のテクストによくついてきてくれ、多くの示唆をあたえてくれた。記して感謝する。

目　次

（1）府主教イラリオンの律法と恩寵にかんする講話… 77
（2）聖ヴャチェスラフ伝…… 90
（3）アンドレイ・ボゴリュプスキイ公殺害の物語…… 93
（4）トヴェーリ公ミハイル・ヤロスラヴィチ伝…… 98

（1）府主教イラリオンの律法と恩寵にかんする講話

〈解説〉

『恩寵と律法についての講話』は、この作品とともにロシア文学の歴史がはじまった、その最初の記念碑的な作品である。この作品は、中世ロシアがキリスト教とともに受け入れたビザンツの文学的な叡智の伝統に育まれる一方、民衆文学の考え方やイメージもとりいれて、ロシア文学のさらなる歴史の先駆けとなった。

『律法と恩寵について』の偉大なる著者、府主教イラリオンの人となりは、『過ぎし年月の物語』が述べているとおりである。

「ヤロスラフは主教たちを集め、聖ソフィア教会におい

Received on September 8, 2011.
電気通信大学共通教育部総合文化部会

てルーシのイラリオンを府主教に任じた。ここでわれわれはどうして洞窟修道院がそう呼ばれるようになったかを物語ろう。神を愛する公ヤロスラフはベレストヴォ村が気に入り、そこに聖使徒たちの教会を置いて多くの僧を養っていたが、彼らのなかにイラリオンという名の司祭がいた。彼は尊く学識のある人で、苦行僧であった。彼はベレストヴォ村から古い洞窟修道院のあるドニエプルの丘に通い、そこで祈りを捧げていた。そこに大きな森があったからである。彼は２サージェの小さな洞窟を掘り、ベレストヴォ村からやってきて勤行をし、そこでひそかに神に祈るのであった。その後、神が公の心に考えをふきこまれたので、公は彼を聖ソフィア教会の府主教に任命したのである。そして、この洞窟はそのまま残った。」

イラリオンは1051年、キエフ大公ヤロスラフによって、キリスト教に改宗してまもないルーシ教会の首長、キエフ府主教に指名され、ルーシの主教たちの会同によって叙聖されたが、これは、988年のキリスト教改宗以来、コンスタンティノープルの意思がなによりも尊重されていた従来の慣行をやぶる、ルーシの宗教的独立を画期する重要な事件であり、研究史においてはしばしば「大いなる不服従」とも称せられている。

イラリオンによる『律法と恩寵について』は、この事件より以前にヤロスラフの注文に応じて書かれたと考えられるが、このことを暗示しているのは以下の文言である。「私たちは無知な者たちにむけて書いているのではなく、書物を読む喜びを十分すぎるほど知っている者たちに向けて書いているのです。私たちは信仰を異にした神の敵たちに向けて書いているのではなく、まさに神の息子たちに向けて書いているのです。見知らぬ者たちではなく、天の王国の継承者たちに書いているのです。」

「書を読む喜びを知る者」、「神の息子」、「天の王国の継承者」とはまさにヤロスラフをさすものと考えられる。ヤロスラフ賢公とイラリオンが同じような宗教思想を共有していたことは、『ヤロスラフ賢公の教会規定』[1]の以下の文言から明らかである。「余、ウラジーミルの子である大公ヤロスラフは、その父の遺言により、キエフと全ルーシの府主教イラリオンと協議し、ギリシアのノモカノンを作成した。」

この作品がいつごろ書かれたかにかんしては、本作品中の次の文言がヒントをあたえてくれる。まず、「この聖母のために、最初の主の祝日である聖なる聖母受胎告知祭の名において教会が建立されました」とあり、『過ぎし年月の物語』によって黄金門の聖母受胎告知教会が1037年に建立されたことが知られているから、『律法と恩寵について』はこれより以降に書かれたことが確かめられる。また、「これに加えて、敬虔なる息子の嫁イリーナを見るがよい。そなたの孫たちやひ孫たちを見るがよい」という言葉も作品のなかに読むことができ、この作品がヤロスラフの妻であるイリーナ存命中に書かれたことがうかがわれるが、イリーナが逝去するのは1050年である。このことから、この作品はそれ以前に書かれたと考えられる。つまり、『律法と恩寵について』は十分な根拠をもって1037年から1050年までに書かれたと推定されるのである。

内容についてであるが、教会文学に造詣の深いアンドレイ・ユルチェンコは、この作品の魅力を次のように述べている。「この作品は、この時代の精神的な雰囲気を鮮やかに伝える、衷心からの格調高い思想に貫かれている。イラリオンが旧約の律法にたいするキリスト教の恩寵の優越をかたるときも、ルーシにおけるキリスト教の拡大を述べるときも、聖ウラジーミルやその息子でその事業の後継者であったヤロスラフにたいする賛辞を口にするときも、ルーシの国の名前で神への熱い祈りをささげるときも、イラリオンの言葉はつねに、深い真実と信仰の歓喜と自らの国への誇りにあふれた生き生きとした感情を失っていない[2]。」

参照したテクストは『中世ロシア文学図書館（БЛДР）』第１巻のものであるが、それは宗務院集成（モスクワ国立歴史博物館所蔵）591番写本Синодальное собрание №591（ГИМ）（15世紀後半）に拠っている。このテクストは『律法と恩寵について』の本文に加え、『祈り』、『信仰告白』、イラリオン府主教叙聖についての短い記述から成り立っている。この宗務院写本の編纂は、『律法と恩寵について』の原初のテクストをもっともよく残していると考えられる。これより後代の編纂は2系統あり、あわせて50以上の写本があるが、ヤロスラフへの賛辞と祈りが抜けている。信仰告白とイラリオン府主教叙聖の記事は、宗務院写本にのみ見出すことができる。

〈翻訳〉

モーセによってあたえられた律法とイエス・キリストによってあらわれた恩寵と真実について。律法がいかに去り、恩寵と真実が地上全体にみたされ、信仰がわれらルーシ民族にいたるまで、あらゆる民族におよんだか。私たちの可汗ウラジーミルにささげる頌詩。ウラジーミルによって私たちはキリスト教に改宗した。私たちの全土から神にささげる祈り。

主よ、祝福したまえ、父よ。

主なるイスラエルの神は祝福されています[3]。キリストの神はおのれの民を訪れ、救済をおあたえになりました。自らの被造物が最後まで偶像崇拝の闇に囚われ、悪魔への奉仕によって滅びるのを見過ごされませんでした。しかし、かつては契約の石碑と律法によってアブラ

ハムの種族を嘉されましたが、時代がくだっては自らの息子を遣わし、福音と洗礼によってすべての民族を救われたのです。あらゆる民族を新生なる復活と永遠の生へと導かれたのです。

あのお方を褒め讃えようではありませんか。天使によってたえず讃えられるそのお方を誉れとしようではありませんか。ケルビムとセラフィムが跪拝されるそのお方に跪こうではありませんか。なぜなら、そのお方は自らの民を親身になってごらんになり、顧みられたからです。とりなしでもなく、天使でもなく、そのお方ご自身が私たちを救われたのです。まぼろしとなって地上にあらわれたのではなく、真実に、肉として私たちのために苦しまれ、墓に葬られましたが、自らとともに私たちを蘇らせるのです。

地上で生きる人間たちのもとに肉をまとっておいでになり、磔の刑を耐えしのばれ、柩に横たえられたのち、地獄にいる者たちのもとにゆかれました。生きたる者たち、死んだ者たちの両方が、みずからの訪れを理解し、神の到来がわかるためにです。神は生きたる者たちにとっても死んだ者たちにとっても力であり、お強いからです。

私たちの神ほど偉大な存在がありましょうか。このお方はおひとりで奇跡を起こしたまい、真実と恩寵の先触れとして律法を備えたまいました[4]。律法のなかで人間性が育まれ、偶像崇拝の多神教をはなれ、ただお一方なる神を崇拝するように、偶像崇拝の多神教から人間を救いだしたまいました。人間というものは生まれつき汚い器であるから、水で汚れを洗い落とすように律法と割礼が必要だったのです。かくして、人間は恩寵と洗礼の乳を飲むことができました。

なぜなら、律法は恩寵と真実の先触れであり、僕だからです。真実と恩寵は来るべき時代、不滅の生の僕だからです。律法が律法にかなう者たちを恩寵ふりそそぐ洗礼へと導いたように、洗礼はみずからの息子たちを永遠の生へといざなうのです。というのは、モーセと預言者たちはキリストの到来について物語り、キリストとその使徒たちは復活と来るべき時代について物語るからです。

この書き物のなかでキリストについての預言者の説教と来世にかんする使徒たちの教えに言及することは余計なことであり、虚栄にも映るでありましょう。ほかの書物のなかに書かれ、そなたたちにもよく知られたことをここで述べるのは、図々しさと名誉ほしさの所業です。私たちは無知な者たちに向けて書いているのではなく、書物を読む喜びを十分すぎるほど知っている者たちに向けて書いているのです。私たちは信仰を異にした神の敵たちに向けて書いているのではなく、まさに神の息子たちに向けて書いているのです。見知らぬ者たちではなく、天の王国の継承者たちに書いているのです。私たちがこれから語るのはまさに、モーセによってあたえられた律法と、キリストによって生まれた恩寵と真実についての物語であり、律法が何を実現し、恩寵が何を成し遂げたかについての話です。

さきに律法があり、あとに恩寵があります。さきに影があり、そのあとに真実があるのです。律法と恩寵の原型は、ハガルとサラです。ハガルは奴隷女で、サラは自由な女です。さきに奴隷の女がいて、あとに自由な女が来るのです。聖書を読む者はこれをわきまえるがよろしい。

アブラハムは若いころから、奴隷ではなく自由の身であるサラを妻に娶っていました。神は悠久の前から発意なされて[5]、みずからの息子をこの世に送り、そのことで恩寵があらわれるようにとお考えになっていました。

サラは生まず女だったので子を産みませんでした。いや生まず女だったのではありません。はかりしれない神の叡智により、年老いてから子を産んだのです。知られるざる、秘められたる神の叡智は、天使と人間には隠されていました。絶対あらわれないものではなくて、世界の終わりに開示されるものとして、つつみ隠されていたのです。

サラはアブラハムに言ました。「主は私に子供を授けてくれません。私の女奴隷ハガルのところに入って、この女から子を産んでください。」恩寵は神に言いました。「私が地上に降りてゆき、世界を救う時ではないならば、シナイ山に行って律法を授けてください。」

アブラハムはサラのこの言葉を聞き、女奴隷ハガルのもとに入りました。神は恩寵のいった言葉のとおり、シナイ山に降臨しました。

奴隷女のハガルはアブラハムによって奴隷の息子を産み、アブラハムはその息子にイシュマエルという名をあたえました。そして、モーセはシナイ山から律法をもってきました。それは恩寵ではなく、影であり、真実ではありませんでした。

こうしたことどものあとで、アブラハムとサラは年老いました。神はアブラハムのもとにあらわれました。アブラハムは真昼に天幕の入り口、マムレ[6]の樫の木のところにすわっていました。アブラハムは神を出迎えて地に届くほど深くお辞儀をして、神を天幕のなかに導きいれました[7]。この世が終末に近づくと、主は人類のもとを訪れ、天上から降り、聖処女の胎内にお入りになりました。聖処女は深く跪拝して、肉の天幕のなかに痛みもなく導きいれて天使に言いました。「ごらんください。私は主のはしためです。お言葉とおり、この身になりますように[8]。」

このとき、神はサラの子宮にはいり、妊娠して、サラはイサクを産みました。自由な者が自由な者を産んだの

です。そして、神が人の輩（やから）を訪れたとき、それまでまだ知られていなかった、つつみ隠されていたものが明らかになり、恩寵が生まれたのでした。律法ではなく真実が、奴隷ではなく息子が生まれました。

息子のイサクは乳ばなれし、頑健になりました。アブラハムはイサクが乳ばなれすると、大いなる宴を催しました[9]。キリストがこの地上にあらわれたとき、恩寵はまだじゅうぶんに頑健に育っていませんでした。成熟にはさらに30年の年月が必要でした[10]。その歳月のあいだ、キリストは隠れておられました。すでに乳ばなれし、頑健になって神の恩寵がヨルダン川にいるすべての人間に明らかになったとき、神は祝宴を張ったのです。丹精こめて育てられ、みずからのひとり子、イエス・キリストに愛されたあの子牛を屠って宴を催したのでした。天にあるものも地にあるものも、同じひとつの喜びへと呼び招かれ、天使も人間もひとつにまとめられるのです[11]。

こののち、サラはハガルの息子イシュマエルが自分の息子であるイサクと遊んでいて、イサクがイシュマエルによって辱めを受けたのを見ました。サラはアブラハムに言いました。「この奴隷女をその息子とともに追い出してください。奴隷の息子は自由な者の息子とともに跡継ぎになるべきではありません[12]。」

主イエスの昇天のあと、キリストの弟子たちとキリストをすでに信じているほかの者たちはエルサレムにいました。ユダヤ人たちとキリスト教徒たちが両方ともいました。天の恵みをもたらす洗礼は、律法の割礼によって汚されていました。エルサレムのキリスト教会は割礼を受けていない主教を受けいれませんでした。さきに信仰をもっていたことをよいことに、割礼を受けた者たちはキリスト教徒たちに、すなわち、奴隷の子らは自由な子らに暴力をふるったからです。両者のあいだで、大いなる論争と争いが起こりました[13]。

自由なる恩寵は、自らの子らキリスト教徒たちが、奴隷なる律法の子供たちユダヤ人に侮辱されているのを見ると、神に叫び声をあげました。「ユダヤ教を律法とともに追い出してください。彼らを国々に散らせてください。なぜなら、影と真実のあいだに、ユダヤ教とキリスト教のあいだに、どんなつながりがあるというのでしょう。」

かくして、女奴隷ハガルはその息子イシュマエルとともに追放されました。自由な息子であるハガルは、自らの父アブラハムの後継者となりました。かくして、ユダヤ人は追放され、国々に散らされ、恩寵の子らキリスト教徒たちは神と父の後継者になりました[14]。月の光が消えうせ太陽が輝くように、恩寵があらわれると、律法と夜の寒さは滅び、太陽の熱は大地を暖めたのです。人間は律法のなかでは誇らかではありませんでしたが、恩寵のなかでは堂々と歩きました。

ユダヤ人たちは律法という蝋燭のもとで身の証をたてようとしましたが、キリスト教徒は恩寵という太陽のもとで自らの救済を打ちたてるのです。ユダヤ人たちは影と律法によって身の証を立てましたが、救われませんでした。キリスト教徒たちは真実と恩寵によって、身の証は立てられませんが救われます。

ユダヤ人たちにあるのは身の証であり、キリスト教徒たちにあるのは救済です。身の証はこの世にありますが、救済は来世にあります。ユダヤ人たちは地上のことで浮かれ騒ぎますが、キリスト教徒は天にある方々について喜びを覚えます。ユダヤ人の身の証は羨望のゆえにとるに足らぬもので、ほかの民族には広まらず、ただユダヤの地にのみまかりとおるだけです。キリスト教徒たちの救済はまさしく福音であり、惜しみなく地上の津々浦々に広がってゆきます[15]。

マナセの祝福はユダヤ人たちの身のうえに成就され、エフライムの祝福はキリスト教徒たちの身のうえに成就されました。マナセが年長であることは、ヤコブの左手によって祝福を受けました。エフライムが年少であることは、その右手によって祝福を受けました。マナセがエフライムよりも年長であったとしても、ヤコブの祝福によって年下になったのです。同じように、ユダヤ教はより以前からあったとしても、キリスト教徒は恩寵によってより大いなるものとなったのです[16]。

ヨシフがヤコブに「父よ、この者に右手を置いてください。この者が年上なのですから」と言ったとき、ヤコブは答えました。「私は知っている。子よ。私は知っているのだ。この者は人らのなかに入り、きわだつものとなるだろう。その弟は兄よりも大いなるものになるだろう。彼の同胞（はらから）はおびただしい数の民族になるだろう。」

まさにそのとおりになったのです。律法は以前からあり、少しばかりみずからを高めましたが、どこかにいってしまいました。キリストの信仰はあとからあらわれましたが、最初のそれより大いなるものとなり、おびただしい数の民族に広まりました。そして、キリストの恩寵は全地上を抱擁し、海の水のようにそれを覆いました。そして、すべての者たちはユダヤの羨望によって傷んだ古きをふりすて、イザヤの預言にしたがって新しきを把持したのです。イザヤはこう言っています。「古きはどこかに消え、私はあなたがたに新しきを告げ知らせよう。神に新しい歌をうたうがよい。その名前は地の果てから讃えられるであろう。海を行く者たち、海に漕ぎ出す者たち、すべての島々よ[17]。」また、次のように言っている。「私のために働く者たちに新しい名が唱えられるだろう。その名は地上で祝福されるであろう。彼らは真実の神を讃えるであろう[18]。」

以前はただエルサレムでだけ崇拝されていたものが、

いまや全地上で崇拝されています。ギデオン[19]が神に申し述べたとおりです。「もしも私の手によってイスラエルを救おうとなさっているなら、羊一匹分の毛にだけ露を置き、すべての土はまったく乾いているようにしてください[20]。」すると、このとおりになったのです。地上のあらゆるところが以前は乾いており、偶像に対するご機嫌取りがあらゆる民族を虜にしており、恩寵の露を受け容れてはいませんでした。ユダヤの地では、神が知られているだけであり、イスラエルにおいて御名は大いなるもので、エルサレムでのみ神は讃えられていました。

ギデオンはふたたび神に言いました。「羊の毛だけが乾いていて、土には一面露が置かれているようにしてください[21]。」すると、そのとおりになったのです。ユダヤ教はおわり、律法はどこかに消え、生贄は受け容れられず、契約の箱と碑文と奉献台は取り払われました。全土に露が滴りました。というのは、地上すべてに信仰が広まったからです。恩寵の雨がふりそそぎ、復活の洗礼盤がみずからの息子たちに不死を授けたからです。

救世主はサマリヤの女につぎのように言いました。「あなたがたが、この山でもエルサレムでもないところで、父を礼拝するときが来る。いまがそのときである。しかし、まことの礼拝者は霊と真理をもって父を礼拝する。父は子と聖霊とともに『そのとおりである』と仰せられて、このように礼拝する者を求めておられる[22]。」この地上のあらゆる土地で聖三位一体が讃えられ、あらゆる被造物から跪拝を受け容れられました。小さき者も大いなる者も預言にしたがって神を讃えました。預言はこう言っています。「彼らはそれぞれ自らの誠実な者に、それぞれ自分の兄弟に『主を知れ』といって教える必要がなくなる。小さき者から大きな者にいたるまで、彼らは私を知るようになる[23]。」救世主キリストは父に仰せられています。「天地の主である父よ、あなたに申し上げます。あなたは知恵ある者や賢い者には隠して幼子にはお示しになりました。これはあなたの神聖なるご意志にかなうことでした。」

どれほど尊い神は人間をお憐れみになったことでしょう。肉の子供は、洗礼と善き業によって神の子となり、キリストの聖体を拝領するものとなります。福音書作者はこう述べています。「言はその名を受け容れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格をあたえた。この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、男の欲によってではなく、神によって、神聖なる洗礼盤のなかで聖霊によって生まれたのだ」と。

天においても、地においても、私たちの神は望まれたすべてのことをおやりになりました。このゆえに、だれが褒め讃えないでしょうか。だれが賞賛しないでしょうか。だれがその栄光の偉大さに跪拝しないでしょうか。だれが数限りない人間への愛に驚かないでしょうか。

はるか昔に父から生まれ、ただおひとり父と玉座をともにし、太陽が光と同質であるように、父と同質であるそのお方は、地に降りたたれ、みずからの民を訪れました。そのお方は父と離ればなれになることはなく、清らかな乙女から、夫との交わりなしでけがれなく受肉し、ご自身だけがご存知になるやり方でお生まれになりました。入ったときと同じように、肉の身をまとったまま出て行かれました。

聖三位一体からふたつの本性、神性と人性とをもつひとりの息子がお生まれになりました。完全無欠なる人間が、幻ではなく人間化によってお生まれになり、完全なる神がその神性によってあらわれました。この世で神的なものと人的なものとをあらわされたお方は、たんなる人間ではありません。

人として母の子宮のなかで育ち、その処女たるをけがさず、神としてこの世に生まれられました。

人として母の乳を吸い、神として天使たちに命じて牧者たちとともに「いと高きところには栄光」を歌わせました。

人としてむつきにくるまれ、神として星によって東方の博士たちを導かれました。

人として飼い葉おけに寝かしつけられ、神として博士たちから贈り物を受け取り、跪拝されました。

人としてエジプトに逃れ、神としてエジプトの偶像から崇拝されました。

人として洗礼をほどこされ、神としてヨルダン川を畏れさせ、逆流させました。

人として裸になって水のなかに入り、神として父から「これは私のいとし子である」という証を得ました。

人として40日間食物を遠ざけ、空腹を感じ、神として誘惑するものに打ち勝たれました。

人としてガリラヤのカナの婚礼に招かれ、神として水をぶどう酒に変えました。

人として舟のなかに眠り、神として風と海に静まれとお命じになり、風と海はおさまりました。

人としてラザロを思って泣き、神としてラザロを死者のなかから復活させました。

人としてろばにまたがり、神として「主の名によって来られるかたに祝福があるように」と叫ばれました。

人として磔にされ、神として自らの力によって自らとともに磔にされた者を天国に導きました。

人として父を食み、霊を発出し、神として太陽の蝕を生じさせ、大地を揺るがしました。

人として柩に横たえられ、神として地獄を破壊し、魂を解放しました。

人として墓は封印されましたが、神として封印をそのままにしてそこから出て来られました。

人として、ユダヤ人はその復活を隠しておこうと躍起

になり、見張り番に金品をわたしましたが、神としてあらゆることを知り、地の果てにいたるまですべての人々によってそれと悟られました。

真実にしたがい、私たちの神より偉大な神はいったい誰でしょうか。わたしたちの神は奇跡をおこなわれる神[24]、十字架とされこうべの丘の苦しみによって、この地に救いの御業を果たされました。酸いぶどう酒と胆汁を口にされ、この酸いぶどう酒を口にされることによって、アダムが善悪の木の甘い果実を食べたことによって犯した過失と罪が追い払われました。

このお方にこうしたことをした者たちは、石につまずくようにあの方につまずき、主がおおせられているように砕け散りました。主はこう仰せです。「この石の上に落ちる者は打ち砕かれ、この石が誰かの上に落ちれば、その人は押しつぶされる[25]。」

あのお方は、あのお方について預言された預言を成就されるために、この世に来られました。次のように仰せられています。「私は、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない[26]。」また、次のようにおっしゃっています。「私が来たのは律法を廃止するためではなく、それを完成するためである[27]。」異民族であるカナンの女が自らの娘を治癒してもらおうと望んだとき、「子供のパンをとって子犬にやってはいけない」と仰せられました。あの者らはこのお方を詐欺師と名づけ、淫蕩な行いから生まれたと誹謗し、ベルゼブルの力によって悪霊を追いだしたと言いました。

キリストは彼らのところで盲人の目を開き、癩病病みを清め、せむしを治し、悪霊にとりつかれた者を癒し、弱き者を強め、死者を復活させました。あの者らは悪人を苦しめるようにあのお方を苦しめ、十字架に釘で打ちつけました。このゆえに、神の最後の怒りはあの者らにおよびました。

あの者らは自分で自分の破滅の証人となりました。救世主はぶどう園と農夫の喩えを仰せられました。「その悪人どもをひどい目にあわせて殺し、ぶどう園は季節ごとに収穫を納めるほかの農夫に貸すにちがいない[28]。」あの者ら自身が自らの破滅の預言者となったのでした。

主はこの地上にいたり、あの者らを訪れましたが、あの者らはあのお方を受けいれませんでした。というのは、あの者らの行いは暗かったので、その行いが明るみに出るのを恐れて、光を憎んでいたのです[29]。

このためにエルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスはその都のために泣いて、言われました。「もしもこの日に、おまえも平和への道をわきまえていたなら…。しかし、いまはそれがおまえには見えない。やがて時が来て、敵が周りに堡塁を築き、おまえを取り巻いて四方から攻め寄せ、おまえとそこにいるおまえの子らを打ち砕くだろう。なぜなら、神の訪れてくださるときをわきまえなかったからである[30]。」また、次のように仰せです。「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で撃ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽のもとに集めるように、私はおまえの子らを何度集めようとしたことか。だが、おまえたちは応じようとしなかった。見よ、おまえの家は見捨てられる。」

そのとおりのことが起こったのです。ローマ人たちが来てエルサレムを囚われの身に貶め、その礎石にいたるまで打ちくだいたからです[31]。ユダヤ教はこのときから壊滅し、こののち律法は夕焼けのように燃えつき、徒党を組んで悪事をなさないようにユダヤ人たちは国々に散らされました。

救世主がやってきましたが、イスラエルからは受け入れられませんでした。福音書の言葉によれば、救世主は自分たちの同胞のところ来られましたが、同胞は救世主を受け入れませんでした。救世主は異民族によって受け入れられたのです。ヤコブが「この方は諸民族の希望である」といったように。なぜなら、あのお方が誕生すると、異民族の博士たちがまずさきにあのお方に跪拝し、ユダヤ人たちはあのお方を殺そうとして、そのために幼子たちを殺したからです。

そして、この救世主の言葉が現実のものとなりました。「東から西から大勢の人が来て、天の国でアブラハム、イサク、ヤコブとともに宴会の席に着く。だが、御国の子らは、外の暗闇に追い出される[32]。」また、つぎのように仰せられています。「神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族にあたえられる[33]。」

キリストはユダヤ人たちのもとに弟子たちを送っていいました。「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい[34]。信仰し、洗礼を受ける者たちが、救われるように。」また、「あなたがたは行って、すべての民を私の弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい[35]。」

恩寵と真実が新しい人々のうえに輝くことはすばらしいことです。主のお言葉のとおり、恩寵の新しい教えというぶどう酒は、ユダヤ教のためにヨレヨレになった古い革袋には注いではならないからです。もしもそんなことをすれば、革袋は破れ、ぶどう酒は流れ出てしまいます[36]。律法という影を袋のなかにとどめておくことができなかったために、彼らは何度も偶像を崇拝しました。このていたらくで、真実の恩寵という教えをどうやって保つことができるというのでしょうか。新しい教えとは、新しい革袋であり、新しいもろもろの民族です。「そうすれば、両方とも長持ちする[37]」のです。

まさにそのようなことが起こりました。恩寵の信仰は地上あまねく広まり、われらがルーシ民族までいたりました。律法の湖は干上がり、福音の泉がこんこんとあふ

れだし、全地上をおおって私たちの身をも浸しました。ごらんなさい。私たちはすでにあらゆるキリスト教徒たちとともに聖三位一体を寿ぎますが、ユダヤ人たちは沈黙しています。キリストは讃えられていますが、ユダヤ人たちは呪われています。異教徒たちが連れてこられ、ユダヤ人たちは排斥されています。

預言者マラキは次のように言っていました。「私はイスラエルの息子たちに望みをもたない。私は献げものを彼らの手から受け取りはしない。日の出るところから日の入るところまで、私の名前は諸国のあいだで崇められ、いたるところでわが名のために香がたかれている。私の名は諸国のあいだで崇められているからだ[38]。」

かくして、私たちはすでに偶像崇拝者とは呼ばれてはいません。キリスト教徒と呼ばれています。もはや望みを絶たれた者ではありません。永遠の生を望むものです。もはやサタンの神殿を建てたりしません。キリストの教会を建立します。悪魔の差し金でたがいに苦しめあったりしません。キリストは私たちのために苦しみをこうむり、こなごなになって神と父への献げものとなったからです。もはや供犠の血をすすって身を滅ぼしたりしません。キリストの清らかこのうえない血を食して救われます。

私たちの国々をお憐れみになり、私たちを蔑ろにせず、発願して私たちをお救いになり、真理を知るように導かれました。

私たちの土地は荒れ果て乾ききっていました。偶像崇拝の灼熱が大地を枯らしていたからです。そこに突然福音の泉が湧き出し、私たちの大地全体を潤しました。イザヤがつぎのように言っています。「底深いところを歩いていた者たちに水がこんこんと現われでる。水のないところは湖となり、乾いた地は水の湧くところとなる[39]。」

私たちは盲目で、真実の光を見ず、偶像の誑かしのなかで淫蕩にふけっていました。救いをもたらす教えに耳を傾けませんでした。しかし、神は私たちを憐れまれました。私たちのなかでも神を知る叡智が輝きました。それは預言のとおりでした。「そのとき、見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く[40]。」

そして、私たちは滅亡の道で躓きました。悪魔の後を追い、生にいたる道を歩まず、異教の言葉を呂律のまわらぬ舌で喋りつづけ、自らのただおひとりの神であり造物主であるお方ではなく、偶像に祈りました。ところが、神の人間への愛は私たちを訪れました。私たちはもはや悪霊たちにつき従ってはおりません。はっきりと私たちの神であるキリストを讃えています。それは預言のとおりです。「そのとき歩けなかった人が鹿のように躍り上がる。口の聞けなかった人のことばは明瞭になる。」

かつて私たちは右も左もわからぬ獣や家畜のようであり、地上のものにあくせくして天上のことを少しも気にかけませんでしたが、ホセアの預言のとおり、主は私たちに永遠の生に導いてくれる教えをお送りになりました。ホセアはこう言っています。「主は仰せである。かの日、私は空の鳥、野の獣と契約を結ぶ[41]。私は私の民に向かって『私の民はおまえたちである』とは言わぬ。おまえたちこそが私に言うのだ。『主、私たちの神はそなたである[42]』と。」

かくして縁なき私たちは神の民と呼ばれるようになりました。敵でありながら、私たちはその息子たちと呼ばれました。

ユダヤ人のように私たちは罵ることをしません。キリスト教徒として、私たちは祝福します。

磔にせよとそそのかしたりしません。磔にされたお方を崇拝せよと助言します。

救世主を磔にしたりしません。救世主に腕を差しのばします。

肋骨のあいだを突き刺したりしません。そこから流れ出る不滅の泉を飲みます。

裏切りのために銀貨30枚をもらったりしません。たがいに私たちのすべての命をあのお方に引き渡します。

復活を隠しません。あらゆる自分たちの家のなかで、「キリストは死者のなかから復活した」と宣言します。

イエスの遺骸は盗まれたとは言いません[43]。人の子はもといたところに上ると言います[44]。

私たちは不信仰ではありません。私たちはペテロのように「あなたはキリスト、生ける神の子です[45]」とあのお方に申し上げます。トマスとともに、「あなたは私の主、私の神よ[46]」と言います。あの犯罪人と同じように、「主よ、あなたの御国においでになるとき、私たちのことを思い起こしてください[47]」と言います。

かくして私たちはあのお方を信じ、７全地公会の聖なる教父たちの伝えを守り、神に祈りを捧げます。もっともっと私たちが熱烈に神を信じるように、もっともっと私たちが神の教えの道に邁進するように、と。

私たち異民族について言われていたことが実現したのです。「主は聖なる御腕の力を国々の民の目にあらわされた。地の果てまで、すべての人が私の神の救いを仰ぐ[48]。」

また、次のように言われています。「主は言われる。『私は生きている。すべてのひざは私のまえにかがみ、すべての舌が神への信仰を告白する』と[49]。」

イザヤの言葉はかくのごとくです。「谷はすべて身を起こし、山と丘は身を低くせよ。曲がった道はまっすぐになり、険しい道は平らになれ。主の栄光がこうして現れるのを、肉なる者は見る。私たちの神の救済を見る[50]。」

ダニエルの言葉はかくのごとくです。「諸国、諸族、諸言語の民はみな彼に仕える[51]。」

ダビデの言葉はかくのごとくです。「神よ、人々があなたに感謝を捧げますように。人々がことごとく感謝を捧げますように。諸国の民が喜び祝い、喜び歌いますよ

うに[52]。」

「すべての民よ、手を打ち鳴らせ。神に向かって喜びうたい、叫びをあげよ。主はいと高いかた、畏るべきかた。全地に君臨される偉大なる王[53]。」

「歌え。私たちの神に向かって歌え。歌え。われらの王にむかって歌え。神は全地の王。巧みな歌でほめ歌を歌え。神は諸国のうえに王として君臨される[54]。」

「全地はあなたに向かってひれ伏し、あなたを讃め歌い、御名を讃め歌います。いと高きかたよ[55]。」

「すべての国よ、主を賛美せよ。すべての民よ、主を讃めたたえよ[56]。」

「日の昇るところから日の沈むところまで主の御名が賛美されますように。主はすべての国を超えて高くいまし。主の栄光は天を越えて輝く[57]。」

「神よ、賛美は御名とともに地の果てにおよぶ[58]。」

「神よ、私たちの救い主よ、わたしたちの声をお聞きください。地の果て、遠い海にいたるまで、すべての者があなたにより頼みます[59]。」

「わたしたちがこの地上であなたの道を知り、御救いがすべての民のうえにありますように[60]。」

「地上の王よ、諸国の民よ、公よ、すべての地上の裁き手よ、若者よ、おとめよ、老人よ、幼子よ。主の御名を賛美せよ[61]。」

イザヤの言葉はかくのごとくです。「わたしの民よ、王たちよ。わたしの言葉を聞くがよい。主は仰せである。わたしの言葉に耳を傾けるがよい。律法は私から発出した。私の裁きは諸国の光である。じきに私の真実が近づいてくる。光のごとく私の救済が湧き出でる。島々が私を待っている。国々は私の力にあつい期待をいだく。」

ローマの国は賛美の声でペテロとパウロを讃めたたえます。この二人によってローマの国は神の子、イエス・キリストを信じました。アジア、エフェソス、パトモスは神学者ヨハンネスを、インドはトマスを、エジプトはマルコを讃えます。あらゆる国々、あらゆる町々は、自らに真の正教信仰を教えた、おのおのの教師を敬い、讃えるものです。

私たちは、偉大で驚くべきことを起こした私たちの教師にして導き手、いにしえのイーゴリの孫にして、栄えあるスヴャトスラフの息子、私たちの土地の偉大なる可汗ウラジーミルを、私たちの力に見合うささやかな賛美の言葉で讃えます。これらの公は自らが在りし日に君臨し、その勇気と豪胆さによってその名を多くの国々にとどろかせ、数々の勝利と威力によって今にいたるまで記憶され、言葉で伝えられてきました。彼らは何のとりえもない、名も知られぬ土地ではなく、地上の津々浦々にいたるまで知られる、音に聞こえた国、ルーシに君臨したのです。

私たちの可汗であるかのウラジーミルは、栄えある者のなかでももっとも栄えある、生まれ尊き者のなかでももっとも生まれ尊き者であり、幼少のみぎりより健やかで壮健でしたが、長じていっそう威と力に満ちあふれ、豪気と賢明さにおいて秀でました。かの者は自らの国の唯一の支配者であり、あるいは平和的手段によって、あるいは従わない者は剣によって、自らの威勢のもとに周辺の国々を束ねました。

かくしてこの者は、自らが生き、自らの国を真実と勇気と賢明さによって牧した日々に、いと高きお方の訪れを得ました。尊い神の慈愛あふれる眼がかれに注がれていたのでした。この者の心のなかで叡智の光が輝き、偶像のご機嫌をとるのが無意味であることを理解し、見えるもの、見えぬもの、すべての被造物をお造りになった、ただお一方の神を捜し求めたのです。

何よりもこの者はしじゅう、キリストを愛し、信仰において力強い、敬虔なギリシアの国のことを耳にしていました。ギリシアの人々は三つの位格をとるお一方の神をうやまい、跪拝していました。彼らのあいだで力と奇跡と徴があらわれました。教会は民であふれていました。村々や町々はすべて敬虔であり熱心に祈りを捧げ、みなは神の御前に畏んでいました。ウラジーミルはこうしたことどもを聞き、心臓は高鳴り、魂は燃えたち、自らとその国がキリスト教に改宗することを心に誓いました。

そのとおりのことが起こりました。神が望みを起こし、人間を愛されたのです。私たちの可汗は古い人間の衣を着たままこの世に降り、腐り果てるものを取りのけ、不信仰の塵を払い、聖なる洗礼盤に身を浸したのです。彼は聖霊と水[62]から生まれかわり、洗礼を受けてキリストとなり、キリストを身にまといました[63]。彼は晴れ晴れと輝いて洗礼盤から出てきました。不滅の息子、復活の息子となっていました。私たちの可汗は代々に伝えられて栄えある永遠の名、ワシーリイを受けました。この名前は高きにある町、不滅のエルサレムの命の書[64]に書きこまれています。

こうしたことが起こりましたが、かの可汗はこのときにいたるまで敬虔な功業を言い立てることはありませんでした。彼のなかにある神への愛を慎ましやかにおもてに顕しただけでしたが、それだけにとどまりません。可汗はそれ以上の功業をなさったのです。この国の全土を教え導き、父と子と聖霊の名において洗礼を受けさせ、すべての都市で明瞭かつ大きな声で三位一体を讃えるように命じ、すべての者たちが、小なる者も大なる者も、奴隷も自由人も、老いも若きも、貴族も庶民も、富める者も貧しい者もキリスト教徒になるように促したのでした。この可汗の敬虔なる命令に歯向かう者は一人もいませんでした。ある者たちが、愛ではなく、命じる人への恐怖によって洗礼を受けたとしても。というのは、可汗の敬虔は権力と綯交ぜになっていたからです。

同時に私たちの国全体がその父と聖霊とともにキリストを讃えたのでした。ことここにいたって、偶像崇拝の闇が私たちから去り、敬虔の暁があらわれました。悪魔に仕える闇が死に絶え、福音の言葉が私たちの国を照らし出したのです。異教の祭祀場は破壊され、教会が建立されました。偶像は毀（こぼ）たれ、聖者らのイコン画があらわれました。悪霊たちは逃げ去り、十字架が町を輝かせました。

キリストの言葉の羊を牧する主教たちは、聖なる祭壇のまえに立ち、血を流さぬ供犠を行いました。司祭や輔祭たち、合唱隊員全員が美しい装飾をほどこし、聖なる教会を壮麗に飾りました。使徒のラッパと福音の雷鳴は町全体に轟きわたりました。神のために焚かれた香が空気を神々しくしていました。山上に修道院が建立され、修道士の姿が現われました。男も女も、身分の低い者も高い者も、すべての人々が聖なる教会に満ち溢れ、こういって讃えました。「ただお一方、聖なる唯一の主、イエス・キリストさま、父なる神の誉れのなかにおられますように、アーメン。キリストは勝利せり。キリストは打ち克てり。キリストは君臨しませり。キリストは讃えられませり。主よ、そなたは偉大なり、そなたの御業は奇しきかな。私たちの神よ、そなたに誉れがあらんことを。」

どのようにしてそなたを讃えたらよいでしょうか。おお、地上の支配者のなかで栄えある、敬虔なる、勇猛無比のワシーリイよ。そなたの善良さと堅固さと力にどのように驚きをあらわせばよいのでしょうか。わたしたちはそなたにどんな感謝の念をあらわしたらよいのでしょうか。そなたのおかげで主を知り、偶像の誑かしから逃れることができたのですから。そなたのご命令によってそなたの国の津々浦々にいたるまでキリストが讃えられているのですから。キリストを愛する者よ、真理の友よ、叡智の器よ、喜捨の住み処よ、私たちはこれ以上にそなたに何を言うことがありましょうか。

いかに信仰なさったのでしょうか。いかにキリストへの愛に燃えたったのでしょうか。いかにして、地上の賢者たちの叡智以上の叡智がそなたに住まうことになったのでしょうか。そなたの理性は、見えざる神を愛し、天上のもののために功業をつくします。いかにしてキリストを求められたのでしょうか。いかにしてキリストに身をゆだねられたのでしょうか。そなたの僕である私たちにお知らせください。私たちの導き手であるお方よ、お知らせください。いずこから聖霊の気配が香ってきたのでしょうか。未来の生の記憶という甘い盃をいずこから飲み乾されたのでしょう。神は恵み深いと、いずこから味わい、ご覧になったのでしょう。

そなたはキリストをご覧にならなかったでしょうか。そのお方の御跡を歩まなかったでしょうか。どうやって、あのお方の弟子となられたのでしょうか。あのお方を見たほかの者たちは信じなかったのに、そなたは見なかったけれども信じられた。真実にそなたの身に、「見ないのに信じる人は幸いである[65]」とトマスに言われた、主イエス・キリストの恵みが降りたのです。ですから、大胆に何の疑念ももたず、そなたに呼びかけます。「おお、祝福された者よ」と。なぜなら、救世主自らがそなたを召命されたからです。そなたは祝福されている。なぜなら、あのお方に信仰を寄せ、そのことにつまずかなかったからです。それは、偽りなき言葉で、「私につまずかない人は幸いである」とあるとおりです。律法と預言者を知っていた者たちはあのお方を磔にされました。が、そなたは律法も預言者の諸書も読んだことはありませんでしたが、磔にされた者に跪拝しました。

いかにしてそなたの心は開かれたのでしょうか。いかにして神への畏れがそなたのなかに入りこんだのでしょうか。いかにして、あのお方の愛に引きこまれたのでしょうか。乞食のなりをして裸足で飢えと渇きに苦しみながらそなたの国に入り、そなたの心を謙抑に導かれた使徒たちを、そなたはご覧にならなかったでしょうか。イエス・キリストの御名によって悪霊が追い払われ、病人が健康になり、唖が喋るようになり、炎が酷寒にかわり、死者が蘇るのをそなたはご覧にならなかったでしょうか。こうした者たちすべてを見ずして、いかにして信じられたでのでしょうか。

驚くべき奇跡です。ほかの皇帝や支配者たちは、聖なる人々が起こした、こうしたことすべてを見て信仰しなかったのです。そればかりではなく、そうした人々を責苦と苦患で苛んだのです。おお、祝福された者よ、そなたはこうした人々がいなくてもキリストのもとに慕いより、恵まれた知力と鋭い知性のみに頼って、神お一方だけが見えるものと見えざるもの、天上のものと地上のものの唯一の造物主であること、その神が人類を救済するために自らの愛し子をこの世に送られたのだということを理解なさったのでした。こうしたことをつらつら考えて、そなたは洗礼盤のなかに入られた。ほかの者らには馬鹿げたものに思えたことが、そなたにとっては神の力のように思いなされたのです。

こうしたことに加えて、貧しい者、孤児、病人、債務者、寡婦、憐れみを求めているすべての人々に、そなたがほどこした夜の喜捨、昼のもの惜しみなさの数々を語りつくせる者がありましょうか。なぜなら、そなたはダニエルがネブカドネツァルに言った言葉をお聞きになっていたからです。ダニエルは次のように言っています。「ネブカドネツァル王よ、どうぞわたしの忠告をお受けになり、罪を悔いて施しをおこない、悪をあらためて貧しい人にお恵みをおあたえになってください[66]。」

誉れにふさわしき者よ、そなたは聞いたことを聞いた

ままに終わらせることはなく、行いにしました。求める者にはあたえ、裸足の者には靴を履かせ、飢える者、貪欲な者には腹いっぱい食べさせ、あらゆる病に病む者には慰めをおくり、借金は返してやり、奴隷には自由をおあたえになりました。

そなたのもの惜しみなさと憐れみ深さはいま、人々のあいだで記憶されています。神やその天使たちの御前ではなおさらです。神のお気に召された喜捨によって、そなたはキリストの永遠の僕として、神の御前に参上する勇気を得ました。「憐れみは裁きに打ち勝つ」、「人間にとって喜捨は、その人に押された刻印である」と言った者が、私の手助けをしてくれます。もっと正確に主が述べられた言葉もあります。「憐れみ深い人は幸いである、その人たちは憐れみを受ける[67]。」

そなたについて、さらに明晰で正確な証言を聖書から引くことにしましょう。使徒ヤコブによって言われたものです。「罪びとを迷いの道から連れ戻す人は、その罪びとの魂を死から救い、多くの罪を覆うことになる[68]。」

一人の人間を改宗させた者にたいして尊い神からそのような褒賞が受けられるならば、ワシーリイよ、そなたはどのような救いを見出すことができるでしょうか。偶像崇拝という迷妄から少なからぬ人間を、十人といわず、町といわず、その国全部をキリスト教への改宗に導くことで、そなたはどのような罪の桎梏を人々から取り除いたことでしょうか。

救世主キリストは天上でどんな栄光や名誉にあずかることができるかを私たちに示し、こうはっきりと言い切っています。「人々のまえで自分を私の仲間であると言い表す者は、私も天の父のまえで、その人を私の仲間であると言い表す[69]。」人々のまえでキリストの仲間であるのを認めたにすぎない者が、父なる神にたいしてキリストから仲間であると認められるならば、「キリストこそ神の子」と信仰告白したばかりではなく、一つの聖堂のみならず、この国の全土において信仰を確立し、キリストの教会を建立し、そこで仕える司祭たちを叙任したそなたは、どれほどキリストから褒められることになるのでしょうか。

偉大なるコンスタンティノスに似た者よ、同じように知性ゆたかで、同じようにキリストへの愛に満ち、同じようにキリストに仕える者たちに恭しく接した者よ。かのコンスタンティノスがニケーア公会議に列席した聖なる教父たちとともに、人間たちに掟をあたえたのと同様に、そなたはしばしば私たちの新しい教父である主教たちと協働し、大いなる敬虔さとともに、あらたに主を知った民にたいしていかに掟を定めればよいかを協議されました。かのコンスタンティノスはギリシア人やローマ人のあいだで神のために帝国を打ち立てたのにたいして、そなたはルーシで同じことをおこなったのです。すでに、かの国でも私たちの国でも、キリストは皇帝（ツァーリ）と呼ばれています。かのコンスタンティノスは自らの母イレーネとともにエルサレムから十字架をもってきて、自らの信仰を世界じゅうに建て、信仰を確立させましたが、そなたはそなたの祖母オリガとともに新しきエルサレム、コンスタンティノスの町から十字架を運び、自らの国じゅうにこれを建てて、信仰を確立させました。かのコンスタンティノスと同じように、自らの生涯において果たした信仰の篤さのゆえに、神は天上においてそなたを同じような栄光と名誉にあずかる者となさったのです。

至福の者よ、そなたの信仰心の篤さをよく証し立てるものは、神聖なる聖母マリアの聖なる教会です。この教会をそなたは正教信仰の礎のうえに建てられました。そこにいまそなたの男性の身である身体が安置され、天使のラッパが吹かれるのを待っておられます。

そなたの息子、ゲオルギイ[70]の服従もきわめて善良で忠節でした。主はこの方をそなたの統治権の代行者としました。この方はそなたの定めた規則をやぶることなく、磐石に調え、そなたの敬虔のゆえに創られたいろいろな制度を壊しはせず、むしろいっそう充実させ、破壊はせず創造されたのです。ソロモンがダビデにたいしてそうであったように、あなたによって完成されなかったことをその方が完成したのです。その方は大きくて聖なる神の叡智の神殿を、そなたの町の神聖さと聖別の基礎のうえに建て、金、銀、宝石、高価な器など、あらゆる美しさで飾りました。教会は周辺の国々に驚くべきすばらしい印象を醸しました。東西を問わず北方の国にほかにそのような教会がなかったからです。

そして、栄えある都、そなたのキエフは桂冠を授けられたように、偉大さによって飾られています。そなたは人々と聖なる町とを、キリスト教徒のすばやい助け手である聖母の庇護に委ねました。この聖母のために、最初の主の祝日である聖なる聖母受胎告知祭の名において教会が建立されました。大天使が聖処女[71]にたいしてあたえた接吻がこの町にもあたえられたのです。もしも聖処女にたいして「喜ぶがよい。祝福された娘よ。主がそなたとともにいる」という言葉があったとしたら、この町にも「喜ぶがよい。敬虔なる町よ。主がそなたとともにいる」という言葉があるのです。

敬虔なる頭よ、そなたの柩から身を起こすがよい。起き上がり、眠気をふり払うがよい。なぜなら、そなたは死んだのではなく、みなが復活するときまで眠っているにすぎないのですから。立ち上がれ、そなたは死んだのではないのですから。全世界の生命であるキリストを信じるそなたが、死んでしまうなどということはありえません。眠気をふり払うがよい。視線を上げよ。さすれば、主が天上の世界でそなたにどんな誉れをあたえたか、地上においてそなたの息子のなかにそなたが紛れもない記

憶を残したことがわかるでしょう。立ち上がれ。自らの息子であるゲオルギイを見るがよい。自らの腹を見るがよい。自らの愛し子を見るがよい。主がおまえの腰から引き出してきた者を見るがよい。そなたの国の玉座を飾るものを見るがよいがよい。喜び、歓喜せよ。

これに加えて、敬虔なる息子の嫁イリーナを見るがよい。そなたの孫たちやひ孫たちを見るがよい。この者たちがいかに生き、いかに主によって守られ、そなたの遺言にしたがっていかに敬虔なる信仰を保ってきたか、聖なる教会のためにいかに熱心に勤めてきたか、いかにキリストを讃えたか、いかにその名前のまえに跪拝してきたかを見るがよい。

その偉大さによって輝く都を見るがよい。花咲き誇る教会を見るがよい。生い茂るキリスト教を見るがよい。聖なる者たちのイコンによって光り輝き、香によって薫たち、神を讃える言葉と聖なる歌が響きわたる町を見るがよい。そして、これらすべてを見て喜び、歓喜し、これらすべてを建てられた恵み深き神を讃えよ。

よしんば主が身体によってではなく、魂によって喜び歓喜すべきこうしたすべての事どもをお示しになられたとしても、そなたはたしかにそれをご覧になられました。なぜなら、そなたによって蒔かれた信仰の種子は、不信仰の炎熱によって乾ききることはなく、神の恵みの雨によって多くの実りをもたらすでしょう。

喜ぶがよい。支配者のなかの使徒よ、そなたがよみがえらせたのは死んだ者の遺骸ではありません。偶像崇拝の病によって死んだ私たちの魂をよみがえらせたのです。そなたによって、私たちは神に近づき、キリストの生命を知ることになりました。私たちは悪霊たちの誑かしによって片輪にされていましたが、そなたによって真っ直ぐになり、生命の道を踏み出したのです。私たちの心の目は見えず、魂の視力を失っていましたが、そなたによって、三つの太陽をもつ神の光に目が開かれました。私たちは言葉をしゃべれませんでしたが、そなたによって言葉をしゃべるようになりました。そして、いまや老いも若きも私たちは一つの本質をもつ三位一体を賛美しているのです。

喜ぶがよい。私たちの教師にして、敬虔さを見守る者よ。そなたは真実という衣服を身につけ、信仰の堅さという帯を締め、真理という靴をはき、叡智という桂冠を戴き、喜捨という銀の首飾りと金の装身具を身につけ、飾りました。敬虔なる長よ、そなたは裸の者にたいする衣服でした。そなたは腹をすかせた者にたいする養育者でした。そなたは空腹に苦しむ者にとって癒す者でした。そなたは寡婦たちの助け手でした。そなたは巡礼者にたいする休憩所でした。そなたは血を流さぬ者にたいする庇でした。そなたは侮辱された者にたいする守り手でした。貧しい者にたいしては富でした。

いま述べた善なるおこないとそのほかの振る舞いによって、そなたは天上で報いを、神を愛するそなたたちに神が用意された福を授かっているのです。神の麗しい御顔を心ゆくまで眺めながら、ご自分の国と、ご自分が敬虔の念をもって君臨された民について、それが平和とそなたによって仕込まれた敬虔さのなかにあるようにとお祈りください。あらゆる異端が呪詛され、主なる神が彼らを戦争や虜囚の憂き目から、あらゆる不幸と災難から、お守りになるようにとお祈りください。

それ以上にそなたはそなたの息子、敬虔なる可汗、わたしたちのゲオルギイについてお祈りください。ゲオルギイが平安と健康に恵まれて、生の深い深淵を渡りおおせ、無傷のまま魂の船を嵐のおよばない天上の船着場まで航海させることができるようにとお祈りください。信仰を失わず、善行という富を携え、神によってかの者に託された民をつまずかせることなく導いて、ゲオルギイはそなたとともに、すべてを統べられる全能の神の玉座のまえに堂々と立たれます。そして、人々を牧するその務めのゆえに、神のために力を尽くされたすべての義人たちとともに、神から不朽の栄光の桂冠を授けられるのです。

祈り

おお、至高のお方、ツァーリにして私たちの神よ、高く栄えあるお方、人間をこの上なく愛されるお方、努力にたいして栄光と誉れをおあたえになり、自らの王国にあずかる者としてください。恵み深きお方よ、私たち、あなたの心貧しき者らを記憶にとどめてください。なぜなら、あなた様は「人間を愛する者」というお名前なのですから。もし私たちに善行がなかったとしても、あなたの憐れみによって私たちをお救いください。「私たちはあなたの民、あなたに養われる羊の群れ[72]」なのですから。あなたはこの羊の群れを偶像崇拝の破滅から救い、新たに導きはじめられたのですから。

羊のことを魂にかける良き羊飼いよ、もし心乱したとしても、私たちを見捨てないでください。あらゆる点で主人の気持ちにかなわない、あらたに贖われた奴隷のように、私たちがあなたにさらに罪を犯したとしても、私たちを拒まないでください。私たちの群れが数が少なくとも、私たちを嫌わず、こう言ってください。「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの天の父はよろこんで神の国をくださる[73]。」

憐れみ豊かで、物惜しみしない主は、悔い改めた者を受け容れると約束され、罪人が改悛するのを待っておられます。私たちの多くの罪を記憶にとどめないでください。あなたに向かう私たちを受け容れてください。私たちの罪のリストを消してください。私たちがあなたを怒らせてしまったとしても、怒りを和らげてください。人

間を愛するお方よ、あなたこそが主です。至高の方です。造物主です。あなたのなかにこそ、私たちが生きるか死ぬかを決める力があります。

私たちは私たちの所業によって神の怒りを受けるにふさわしいものですが、恵み深いお方よ、その怒りを捨て去ってください。誘惑からこの身を遠ざけてください。私たちは塵あくたにすぎないのですから。自らの僕とともに裁きの場へと入らないでください。なぜなら、私たちはあなたの民であり、あなたを探しており、あなたにしがみつき、あなたのまえでひどく悲しんでいるのですから。私たちは罪をおかし、悪事を働きました。あなたが私たちにお命じになったように、掟にしたがわず、掟を守りませんでした。

地上の者である私たちは、地上のものに跪きました。あなたの栄光が眼前にあらわれても悪事を行っていました。肉の欲望に身をゆだね、罪と生の悲しみの奴隷となり、自らの主から背をそむけ、悪しき生のゆえに呪われていました。私たちは改悛します。私たちは懇願します。私たちは祈ります。私たちは自らの悪しき行いを悔い改めます。私たちはあなたへの畏れが私たちの心に舞い下りることを懇願します。私たちは、最後の審判のとき、あなたが私たちを憐れんでくださることを祈ります。どうぞお救いください。寛大さをお示しください。私たちの面倒を見てください。あなたの慈悲をお示しください。お憐れみください。私たちはあなたのものです。私たちはあなたの被造物です。私たちはあなたの手になる者です。

「主よ、あなたが罪をすべて心にとめられるなら、主よ、だれが耐ええましょう[74]。」もしもその行いによって誰でもが報いを受けなければならないなら、だれが救われましょうか。なぜなら赦しはあなたにあるからです。憐れみはあなたにあり、多くの救いもあなたにあります。私たちの魂もあなたの両手のなかにあり、私たちの呼吸もあなたのご意志のなかにあります。あなたが私たちを憐れみ深く見つめるかぎり、私たちは平穏無事に毎日を送ることができます。もしもあなたが怒りをもって私たちを見るならば、私たちは朝露のように消えてしまうでしょう。塵あくたが嵐に向かって立つことができないように、私たちはあなたの怒りに向かって立つことはできません。

私たち被造物は私たちをお造りになったお方へ憐れみを請い求めます。神よ、大いなるあなた様の慈しみをもって、私たちをお憐れみください。なぜなら、あらゆる恵みはあなた様から私たちに、あらゆる不正は私たちからあなた様に向かうからです。私たちみなが背き去りました。私たちはみなともに穢れています。私たちのなかの誰一人として、天上のことに心を砕き、天上のことを探し求める者はありません。みなが地上のことばかりを考え、地上の生の悲しみのことにあくせくしています。主の慈しみに生きる人は地上から絶えた[75]からです。あなたは私たちをお見捨てになり、私たちを蔑まれました。なぜなら、私たちはあなたを求めず、目に見えるものにばかり執着したからです。

それゆえに、私たちは、あなたから離れ去り、あなたの道を歩かなかったエルサレムにたいしてあなたがなされたことを、私たちにもなされるのではないかと恐れています。私たちの行いのために、かのエルサレムになされたように、私たちになさらないでください。私たちの罪のゆえに私たちに報いを降さないでください。わたしたちにご寛大にお接しくださり、私たちを長い目でご海容くださり、私たち、あなた様の僕たちに向けられる、あなた様の怒りの炎をお消しください。ご自身で私たちをあなた様の真実へとお導きください。あなた様のご意志で私たちが何をしたらよいかをお教えください。なぜなら、あなた様は私たちの真の神であり、私たちはあなた様の民であり、あなた様の一部であり、あなた様の財産だからです。

私たちは異教の神に向かって私たちの手を広げることはないし、何とかという偽りの預言者についてゆくこともないし、異端の説に拠り立つこともないからです。私たちは真の神に呼びかけます。天上におわすあなた様に向かって目をあげ、私たちの腕をさし伸ばし、あなた様に祈りを捧げます。人間を愛する恵み深いお方として私たちをお許しになり、私たちをお憐れみください。私たち罪深き者どもを改悛にお導きください。あなた様の怖ろしい最後の審判において、私たちがあなた様の右手に立つことを拒まないでください。私たちを義人たちの祝福にあずからせてください。

この平安が続くかぎり、私たちに災難と試練をもたらさないでください。私たちを異教徒たちの手にわたさないでください。あなた様の町が囚われの町と呼ばれませんように。あなた様の群れが異邦の国で寄留者と呼ばれませんように。異国の民に「彼らの神はどこにいる」と言われませんように。私たちに悲しみ、飢え、不慮の死、火事、洪水をおよぼされませんように。

信仰のしっかりしていない者たちが、信仰の道を踏みはずしませんように。その者たちは加減をして罰してください。大いにお憐れみください。憐れみ深く正道に戻してやってください。限度をもって悲しみにあわせてください。悲しみのなかで慰めをあたえてください。私たちの本性は長いあいだあなた様の怒りにさらされるのを、藁が炎に耐えることができないように、耐えることはできないのですから。

柔和になってください。お憐れみください。なぜなら、憐れみ、救うのはあなたの御業なのですから。あなた様の民へのお憐れみをどうかやめないでください。敵を追い払ってください。平和を確固たるものにしてください。

諸国を睦みあうようになさってください。飢えを癒してください。私たちの君主のために諸国の民を脅かしてください。貴族たちを賢明にしてください。町々を強くしてください。あなたの教会が成長するようになさってください。自らの財産である善男善女をお守りください。赤子たちをお救いください。奴隷の身にある者たちを、囚われの身にある者たちを、旅路にある者たちを、航海をしている者たちを、牢につながれている者たちを、渇望や渇きや貧困にある者たちを、みなをお憐れみください。みなをお慰めください。みなに喜びをおあたえください。彼らに身体の喜びを、魂の喜びをおあたえください。

あなた様の至聖なるお母さま、天上の聖なる諸力、あなたの先駆け、洗礼者ヨハネ、使徒たち、預言者たち、殉教者たち、徳高い修道士たち、あらゆる聖者の祈祷と祈りをもって、私たちを慈しみ、私たちをお憐れみください。あなたの憐れみによって、父と聖霊とともにあなた様、私たちの主イエス・キリスト様を、分かちえない唯一の神であり、天上と地上において天使と人間たち、見える被造物と見えざる被造物に君臨されます三位一体を、牧されております私たちが、信仰を一にして、みなそろって明るい心で喜びいさみ、讃えることができますように。今も永遠にとこしなえに、アーメン。

信仰告白

私は、全宇宙を支配される父なる唯一なる神、空と地、見えるものと見えざるものの造り手を信仰します。

私は、唯一なる主、イエス・キリスト、あらゆる時代に先駆けて父からお生まれになった、神のひとり子、光の光、真実なる神からお生まれになった、被造物ではない、あらゆるものをお造りになった、父と同じ本質をもつ真実の神を信じます。

イエス・キリストは、私たち人類のために、私たちの救済のために天から降り、聖霊と処女マリアによって受肉し、人間の身となられました。ポンティス・ピラトによって私たちのために十字架にかけられ、苦しみぬいたのち、葬られましたが、聖なる書物によれば三日目に復活され、再び栄光をもって来臨し、生きたる者たちと死にし者たちを裁かれます。その王国には限りがありません。

私は主なる聖霊を信じます。聖霊は生命の源となり、父から発出します。父と子とともに崇拝され、讃えられています。聖霊は預言者によって語りました。

私は聖なる、一堂に会す、使徒たちの教会を信じます。

私は罪の赦しのただ一回の洗礼を信仰します。

私は死者の復活と来る世の生を待ち望みます。アーメン。

私は三位一体において讃えられる唯一の神を信じます。父は何物からも生まれず、ほかに始原をもたず、限りがありません。子は生まれましたが、父と同じようにほかに始原をもたず、限りがありません。聖霊は父から発出し、子においてあらわれますが、ほかに始原をもたず、父と子と同じ本質をもちます。私は、ひとつの本質をもち、位格に分かちもたれた、名においての三位一体、唯一なる神を信じます。

私は分離を結び合わせることをせず、統合を分かつことをしません。というのは、三つの位格は混ざらずに結び合わされており、不可分に分離されているからです。父と名指されるのは、生まれたものではないからです。子と名指されるのは、生まれたものだからです。聖霊と名指されるのは、発出するからであり、切り離されるからではありません。父は子ではなく、子は父ではなく、聖霊は子ではありませんが、それぞれの位格には神としての性質のほかに、それが混じり合わずに兼ねそなえた独自の本質があります。なぜなら、三位一体のなかに唯一の神としての性質があり、唯一の支配があり、唯一の王国があります。智天使たちによって讃えられる共通する三つの聖なるものがあり、天使たちと人間たちによって共通して崇拝されるものがあり、全世界によって崇拝される唯一の栄光と恩寵があります。

この唯一なる神を私は知り、信仰しています。私はその神の名において、父と子と聖霊の名において洗礼を受けました。聖なる教父たちの書物によって受け容れたように、私は教えを受けました。

私は信じ、信仰します。子は父と聖霊の尊いご意志とご意向によって人類を救済するために地上に降臨されました。天と父は分かちがたくいまし、聖霊の介在によって聖母マリアの子宮のなかに入り懐胎しましたが、それはご自身ただお一人がご存知でした。男性の精なしにお生まれになりました。神にふさわしいように母の処女たることを保ち、誕生のときも、誕生の前も、誕生のあとも、神の子たる性質と分かたれることはありませんでした。

なぜなら、天上においては母なく、地上においては父なく、ミルクを飲まされて育てられ、正真正銘の人間とおなりになりました。幻としてではなく、ほんものの私たちの肉を身にまとわれたのです。二つの本性と意志の願いにおいて、完全なる神であり完全なる人間であり、あったものをどけることなく、なかったものをわがものとされました。

キリストは私のために人間として肉において苦しまれましたが、神として神の身で苦しまれることはありませんでした。不死なる者は死にましたが、それは死んだ私をよみがえらせるためです。キリストは地獄にいきましたが、それは私たちの祖先であるアダムを立たせ、神に近づけ、悪魔たちを縛りあげるためです。キリストは神として立たれ、死人たちのもとから勝利者キリストとし

て、私の皇帝として、三日目に旅立たれました。そして、自分たちの弟子のまえに何回も現われ、天上の父のもとに昇られ、かつて父と別れることはなかったが、いまやその右手に坐することになったのです。

わたしは、キリストがふたたび、前のときのようにひそかにではなく、父の栄光において天の軍勢とともに天から来ることを心待ちにします。大天使の声に合わせて、死者たちはこのお方を迎えに出ます。このお方は生者と死者を裁き、その者の所業に応じて報いをあたえるでしょう。

私たちは第７回公会議[76]の聖なる教父たちを信じます。彼らによって否定された者たちをしりぞけます。彼らによって呪詛された者たちを呪詛します。書かれたものによって私たちに受け継がれたものを受け容れます。

私は聖なる栄えある処女マリアを神を生んだ者（生神女）と呼び、崇拝し、信仰をもってかの女に跪拝します。聖なる聖母のイコンにおいて、私は私の主が嬰児としてかの女の懐に抱かれているのを見て、心に喜びを覚えます。かのお方が磔になっているのを見、あの方が復活され、天上に行くのを見て喜びに満たされ、両腕を差し伸べ、あのお方に跪拝します。そして、イコン画にあの方の聖なるお気に入りに者たちをみて、彼らをお救いになったお方を讃えます。彼らの遺骸に愛と信仰をもって接吻し、彼らの奇跡を語りひろめ、彼らからの治癒を頂戴します。

私は全キリスト教の使徒的教会にはせ参じ、信仰をもってそこに入り、信仰をもって祈りを捧げ、信仰をもってその場から退出します。

かくのごとく私は信仰し、それを恥じることはありません。私は諸民族のまえで信仰を告白し、信仰告白のためにみずからの魂を捧げます。

あらゆることについて神の栄光あれ。神は私に私の力を超えて恩寵をおあたえになります。ルーシの国の誠実なる教師にして聖職者たちよ、私のために祈ってください。アーメン。

私、人間を愛する神の憐れみによって修道士であり、司祭であるイラリオンは、神の高きご意志にもとづき、神に忠実なる主教たちによって聖別され、神のご加護あらたかな大いなるキエフの都に、牧者、教師たる府主教として坐することになった。それは6559（1051）年、ウラジーミルの子、可汗ヤロスラフの治世中のことであった。アーメン[77]。

（２）聖ヴャチェスラフ伝

〈解説〉

10世紀はじめ、大モラヴィア国家が騎馬民族ハンガリー族から受けた打撃によって崩壊したのち、キュリロス・メトディオスの伝統の継承者になったのは、小さな国、チェコ公国であった。かのスラヴ人の使徒の弟子たちが885年この国から追放されてからも、その伝統はとだえることはなかった。伝承によれば、チェコの統治者であるボリヴォイ（もしくはボルジヴォイ）は874年ころ主教メトディオスによって洗礼を受けた。

この国には、ラテン語の書き言葉とならんで、グラゴール文字のアルファベットにもとづいたスラヴ語の書き言葉と、スラヴ語による典礼が存在していた。スラヴ語の書き言葉の最古の文学遺産で、10世紀から11世紀に成立したと考えられるキエフ・グラゴール文書の成立と、このプラハ公国を結びつけて考える研究者たちもいる。同様の思考から、11世紀から12世紀にかけて成立したプラハ・グラゴール文書がチェコで生まれたと考える説も存在する。1033年プラハからほど遠くない場所に建立されたサーザヴァ修道院は、スラヴ語文書を制作する重要な中心地であり、スラヴ諸文化を相互に結びつけていた。

チェコ文学のはじまりは、キリスト教に改宗してまもない社会に起こった劇的な事件と濃厚な結びつきをもっている。921年、ボリヴォイの寡婦リュドミラは、自らの息子ヴラティスラフの死後、権力闘争の犠牲になって斃れた。リュドミラは、自らの嫁ドラゴミラの命によって絞殺されたのである。ドラゴミラは、息子たちが幼かったので、自らのもとに権力を集中させようとした。年かさの孫でリュドミラによって養育されたヴャチェスラフ（ヴァーツラフ）は、祖母にならってキリスト教会を崇敬し、それを確立させたが、のち（928年か935年）に自らの弟ボレスラフとその家臣に殺害された。ボレスラフたちは、兄公の外交施策が受身であり、彼に対するキリスト教聖職者の影響力が大きいことに不満を抱いていた。

ヴャチェスラフの死後まもなく、彼の殺害の張本人であったボレスラフは、教会で自らの罪を懺悔し、その発意によってヴャチェスラフは聖者の列に加えられることになった。あっという間に、リュドミラ、ヴャチェスラフという新しい受難者に対する崇敬が全国家的な意義をもったのである。10世紀から13世紀にかけて、スラヴ語でもラテン語でも、二人の聖者に対する聖者伝や頌歌などの作品が作られた。

そうした一連の作品のなかで、930年代という最も古い時代に制作された作品が、本稿で取りあげる『ヴャチェスラフの殺害物語』という作品である。この作品はまず間違いなく、ボレスラフ公と近しいキリスト教聖職者のあいだで創作された。聖ヴャチェスラフにまつわるほかの作品群と異なり、兄の殺害におけるボレスラフの役割は、この作品ではとるに足らぬものとされている。ボレスラフはおもに悪意ある助言者たちの一種の道具として

しか描かれていない。『ヴャチェスラフの殺害物語』におけるヴャチェスラフは柔和で賢い指導者、悪に対して暴力で立ち向かうことのないキリスト教徒の模範として描かれている。

ヴャチェスラフ崇敬は、リュドミラへのそれとともに、非常に早い段階でキエフ・ルーシで広く知られていた。1095年から1096年にかけて成立した典礼用の暦聖者伝（ミネヤ）にすでに、ヴャチェスラフへの賛美歌（カノン）が収められている。ヴャチェスラフのために書かれた聖者伝テクストは、ボリスとグレープにまつわる聖者伝作品群に影響をあたえた。チェコの侯ヴャチェスラフがルーシで崇敬されていたことを示すひとつの例として、研究者たちは1036年に生まれたヤロスラフ賢公の息子がヴャチェスラフと名づけられたことを挙げている。ルーシにおいて、チェコの侯ヴャチェスラフとリュドミラの聖者伝の短いヴァージョンが制作され、教会暦（プロローグ）に収められたのは、13世紀以前のことである。16世紀前半以前に成立した『ヴャチェスラフの殺害物語』の特別編纂本は、ふつう暦聖者伝（チェーチヤ・ミネヤ）に収められているがゆえに、人文科学研究の分野では暦聖者伝版と呼ばれている。この作品は16世紀から17世紀にかけてのロシア写本の伝統において広く知られている。

12世紀から13世紀にかけてのチェコ本国の文化的・歴史的状況は、スラヴ語の書き言葉とスラヴ語典礼の発展にとって好ましからざるものであった。このために、殉教者侯聖者伝のスラヴ語テクストは残らなかった。スラヴ語テクストはロシア語とグラゴール文字のクロアチア語の写本で伝存されるのみである。なかでも、リュドミラのスラヴ語聖者伝は、縮小版暦聖者伝によってのみ知られている。

1827年、有名なロシアの文献学者Ａ.Ｘ.ヴォストコフがルミャンツェフ写本によって『ヴャチェスラフ殺害物語』を刊行した。このときになってはじめて、その時まで知られていなかった、いにしえのチェコ文学とキュリロス・メトディオスの伝統がたどった歴史のひとコマが明らかにされたのだった。

『チェコの侯、ヴャチェスラフの殺害物語』のテクスト（あるいは、ヴォストコフによる伝説）は、キリル文字のもっとも古いヴァージョンとして、以下の4つの写本が知られている。1. *РГБ*, ф.256, №436（ロシア国立図書館、フォンド256－Н.П.ルミャンツェフ写本集成－, 436番－ヴォストコフにより発見された－16世紀初頭）。2. *БАН*, Архангельское собр., № Д. 142（ロシア科学アカデミー図書館、アルハンゲリスク写本集成D142番、16世紀後半）。3. *ГИМ*, собр. Е.В.Барсова, №1466（国立歴史博物館、E.B.バールソフ写本集成、16世紀終わりから17世紀はじめにかけて）。4. *РГБ*, ф.556 - собр. Вифонской духовной семинарии- № 91（ロシア国立図書館、フォンド556 - ヴィフォン神学校写本集成91番、17世紀第2四半世紀、最近発見された）。

これら４つの写本は、細かい異同はあるが、ほぼ同じテクストを収めている。このテクストは共通の原テクストに遡及しうると考えられる。本稿の翻訳の原典となったのは、参照したテクストは『中世ロシア文学図書館（БЛДР.II）』第２巻のもの（テクスト168－175頁、注釈523－526頁）であるが、それはもっとも古くもっとも欠落の少ないルミャンツェフ写本（１）のテクストにもとづいている。意味の通らない箇所の修正は、暦聖者伝テクストとグラゴール文字テクストによっておこなった。

〈翻訳〉

９月28日　チェコの侯、聖ヴャチェスラフの殺害

主よ、祝福したまえ。父よ。

見よ、私たちの主イエス・キリストが仰せになった預言がいま実現した。主はこうおっしゃっている。「なぜなら、終末を迎える最後の日々に、私たちが考えるように、兄弟が兄弟に対して立ち上がり、息子が自らの父に立ち向かい、家じゅうが敵だらけになるだろう。人間はたがいに無慈悲になり、神は彼らの行いゆえに彼らに罰を下すであろう。」

チェコの国にヴォロティスラフ[78]という名の誉れ高き侯と、その妻ドロゴミル[79]が暮らしていた。二人は長男を生み、洗礼のときヴャチェスラフという名前をつけた[80]。そして、少年が、髪の毛を切る年齢に達した[81]。ヴォロティスラフ侯は司教のノタリウス[82]と合唱隊全員を呼んだ。彼らは聖マリアの教会[83]で祈祷歌[84]を歌い、主教は少年の手をとって祭壇のまえの踏み段に立たせ、祝福をあたえてこう言った。「主、イエス・キリストさま、祝福の言葉をこの少年にあたえてください。あなたは自らの正しき者たちに祝福をあたえてきたのですから。」そして、侯の髪の毛が切られた。

このゆえに私たちはこう考えている。この司教の祝福と敬虔なる祈りによって、この少年が成長をはじめ、神の恩寵によって護られたのだと。自らの祖母、リュドミラ[85]は司祭たちを教育するように、教会スラヴ語の書物を教えさせたが、この少年は書物をよく理解した。ヴォロティスラフはブドゥチ[86]に少年を送ったが、少年はラテン語の書物を学びはじめ、よく覚えた。

この頃、ヴォロティスラフ侯が逝去し、父祖の玉座にはヴャチェスラフがつき、このときからボレスラフ[87]は彼に臣従しはじめた。二人は幼かったので、その母ドラゴミラが国を掌握し、臣下の者たちに命令をくだした[88]。母は自らの息子たちを育てあげ、ヴャチェスラフが臣下

の者たちに命令をくだすようになった。彼には４人の姉妹たち[89]がおり、さまざまな侯に嫁いでいたが、持参金で相応の暮らしをしていた。

神もまたヴャチェスラフ侯に恩寵を授けた。よき司教や司祭のように、ラテン語の書物が読めるようになったのである。ギリシア語の本やスラヴ語の書物を手にとったときも、誤りなく明晰に読んだ。書物を読むことができただけではなく、よき信仰を行いとして示し、あらゆる貧しい者たちに惜しみなく喜捨をおこなった。貧しい者たちに食べ物や衣服をあたえたり、寡婦を侮辱から護ったり、富む者にも貧しき者にもひとしく憐れみをたれ、黄金で教会を飾り、心のたけを傾けて神を信心し、自らの生活において考えうるあらゆる善をおこなった。

チェコの貴顕たちが傲慢になり、内紛が起こった。父が死んだとき、侯は13歳[90]で彼らに比べまだ幼かったからである。このころ、その弟も成長し、ものごごろつく年頃になった。悪魔は裏切り者のユダのように、邪悪なかれの取り巻きたちの心に忍びこんだ。書物には次のように書かれているからである。「自らの主人に逆らう者はみなユダに似ている」と。ある人々はヴャチェスラフに「ボレスラフが、母親と配下の貴族と謀ってあなたを殺そうとしています」とさかんに言いたてた。邪悪な犬どもがヴャチェスラフに罪もない母親を追放させようとしたのである。

ヴャチェスラフは神への畏れを知っていたので、「自らの父と母を自分が自分を愛すのと同じように愛しなさい。自らの近親者を自分が自分を愛するように愛しなさい[91]」という使徒の言葉を心に留めていた。彼は神の真実なるものをすべておこなおうと考えて、母親を呼びもどし、泣きながら告解してこう言った。「主なる神よ、この罪を彼らに背負わせないでください[92]。」また彼は預言者ダビデの言葉も心に留めていた。「私の若いときの罪と背きを思い起こさないでください[93]。」

このようにヴャチェスラフは母親を大切に思っていたので、母親も自らの息子の信仰をおおいに喜び、貧しき者たちへの喜捨を尊んだ。彼は資産の乏しい者には食物をあたえ、孤児がいれば侮辱から護り、旅ゆく人には財産をあたえた。それは聖書に「おまえたちは私が旅をしていたとき宿を貸した[94]」と書かれているからである。もしも神の僕である聖職者がいれば、もしも家僕がいれば、もしもあらゆる巡礼者がいれば、寒さのなかを異郷の地をさまよう者がいれば、こうしたすべての人々に衣服をあたえ、食べ物を恵んだ。すべての町に揺るぎなく教会を建立し、いかなるときもあらゆる民族から神の僕を招き集めた。偉大なるもろもろの民族のあいだでそうあるように、神への礼拝を毎日おこなったが、それは善良で義なるヴャチェスラフの司教によって司式されたのである。そして、神はヴャチェスラフの心には、聖ヴィトゥス[95]に捧げる聖堂を造るように霊感を吹きこまれ、悪い考えに染まらせることはなかったが、ボレスラフには悪魔が自らの兄を殺せと唆し、その魂は永遠に救われないのである。

聖ヴャチェスラフの守護聖人になっているエメラム[96]の日がやってきて、ヴャチェスラフは神を思って歓喜にひたった。一方、そのとき邪悪な悪魔はボレスラフを呼びまねき、かつてユダヤ人がキリストに対しておこなったように、ヴャチェスラフを殺せという悪魔的な陰謀を教唆した。

あらゆる町で教会の聖別式がおこなわれていた。ヴャチェスラフは町をめぐりあるき、ボレスラヴリ[97]の町にやってきた。日曜日には、コスマスとダミアヌス[98]に捧げる祭礼がおこなわれたが、ヴャチェスラフはこの祭礼を聞きおわると、プラハの家に帰りたくなった。しかし、ボレスラフはそれを許さず、涙ながらにかきくどき、懇願しながらこう言った。「どうして、お兄さんはビールに手もつけずに行ってしまうのですか。」彼は弟のいうことに逆らわず、家に帰らず馬に乗り、ボレスラフの宮廷で自らの朋友たちと遊び、戯れはじめた。その宮廷で、「ボレスラフがあなたを殺そうとしています」と知らせる者たちがいたが、彼はこれを信じることなく神に望みをかけていた。

その夜、兵士たちがグネヴィサの屋敷に集合し、ボレスラフを自らのもとに呼び招き、邪悪な悪魔的助言をおこなった。ピラトのもとに人々が集結してキリストに陰謀を企てたように、この邪悪な犬どもはピラトのもとに押し寄せた人々と同じように、いかに自分たちの主人を殺害するかを談合したのである。彼らは言った。「朝の祈祷のときに襲撃して侯を捕らえよう」

朝になった。朝の祈りの合図に鐘の音が響きわたった。ヴャチェスラフは鐘の音を聞き、言った。「主よ、あなたに栄光がありますように。あなたは私にこの朝をあたえてくださったのですから。」そして、ヴャチェスラフは起きあがって朝の祈りへと赴いた。ボレスラフは門のところで彼に出会った。ヴャチェスラフは辺りを見回して言った。「昨日は私たちをよくもてなしてくれた。」悪魔はボレスラフの耳にぴったりと口を寄せて、彼の心を堕落させた。すると、ボレスラフは剣を引き抜いて答えた。「こんどは、もっとよくもてなして差しあげよう。」そして、彼の脳天に剣で一撃を食らわせた。ヴャチェスラフは身を翻して言った。「おまえは何を考えているのだ？」

ヴャチェスラフはボレスラフに抱きつき、投げを打つと、ボレスラフの足もとにどっと倒れて言った。「兄弟よ、神がそなたに報いるであろう。」ヴャチェスラフは苦しみながら駆けよると、弟の腕に剣を振りおろした。そのあと、彼は弟を突き放し、教会のなかにかけこんだ。と

ころが、そこに二人の悪魔が潜んでいたのである。チスタとティラが教会の扉のかげからあらわれてヴャチェスラフを打ち殺した。グネヴィサがかけより、肋骨のあいだに剣を突きとおして止めを刺した。魂魄が我が身を離れてゆくとき、ヴャチェスラフは言った。「主よ、私の魂を御手にゆだねます[99]。」

この町で、ヴャチェスラフとともにミスチナ一人が殺され、ほかの男どもはプラハに向かった。ある者たちは殺され、ある者たちはちりぢりに諸国に逃げた。従者たちは殺され、神の僕たちは略奪を受け、プラハの町から追放され、その妻らはほかの男たちに下賜された。悪魔の思惑はすべて実現した。自らの侯が殺されたのだ。

ティラはボレスラフに言った。「奥さまのところに行きましょう。殿がひとりでお兄さまと自らのお母さまのことをお嘆きにならないように。」ボレスラフは言った。「私たちがほかの者たちを片づけているあいだに、妻はどこにも逃げ隠れしないだろう。」

ボレスラフはヴャチェスラフを斬り殺して立ち去ったが、彼の遺骸を埋葬しなかった。クラステイという司祭が彼の遺骸を運び、教会のまえに置き、薄い布をかけた。母親は自らの息子が殺されたのを聞きつけて、息子を探してかけよってきた。彼女は遺骸を見ると、えぐられたその心臓のうえに倒れ、自らの息子の身体の部分部分を拾いあつめて泣いた。集めおわっても、遺骸を家には運びこむことができず、司祭の家で湯灌をほどこし、衣服をまとわせて、教会のまんなかに安置した。母はヴャチェスラフの死に動転し、クロアチア人のもとに逃げ去った。というのは、よそ者が容赦しないことを怖れたからである。ボレスラフは母を呼び戻すため人を遣ったが、追いつかなかった。

ボレスラフは司祭パウロを呼び出し、彼の遺骸に祈りを捧げるように言った。善良で義なる主人、神を敬い、キリストを愛する者、ヴャチェスラフの敬虔なる遺骸は葬られた。実にヴャチェスラフは敬虔に畏敬をもって神に仕えたのである。彼の血は三日のあいだ地に流れ去ることがなく、３日目の晩、みなが見ているなかで血は教会の壁に滴り、それにみなが驚いた。

そして、私たちはさらに神に望みをかけている。善良なヴャチェスラフの祈りと善き信仰のゆえに、もっと多くの奇跡が起こった。真実、キリストの受難は彼の受難に似ている。パウロのように彼は切り刻まれ、その従士たちは、キリストのためにベツレヘムの子らが殺されたように、ヴャチェスラフのために殺されたのである。実に、すべての人類がヴャチェスラフために悲しみ、ヴャチェスラフのために泣いたのである。

ヴャチェスラフ侯は、6337年、インディクティオ2年、太陽の周期で3日、月の周期で8日、9月28日に殺された。そして、神よ、ご自身のために罪なくして殺されたすべての人々ともに、永遠の安らぎの住みかにかれの魂を安らわせたまえ。主よ、そこでは、あらゆる義人たちがそなたの命の光のなかで安らいでいるのだから。

神は自らの選ばれたる者たちを、不義の者らからの侮辱にさらされるままにしてはおかれない。自らの憐れみで彼らをつつみ、すっかり堅くなった心を悔い改めに導き、自らの罪を認めさせる。ボレスラフは、どれほどの罪を自らが犯したのかを、主なる神のまえで記憶に留めた。彼は神とあらゆる聖人たちに祈り、従者を差し遣わして、自らの兄の遺骸をボレスラヴリの町から栄えある都プラハに運ばせた。彼は言った。「私は罪を犯しました。私が罪を犯したこと、あなたに背いたことを、私は知っています[100]。」

そして、ボレスラフは聖ヴィトゥスの教会の、12使徒の祭壇右手に、ヴャチェスラフの遺骸を安置した。ヴャチェスラフは自身こう言ったのだった。「ここに私は教会を立てる」と。ヴャチェスラフ侯は3月4日にここに改葬された。神よ、アブラハム、イサク、ヤコブの懐で彼の魂に平安をあたえたまえ。そこでは、すべての正しい者たちが、私たちの主、イエス・キリストの復活を待ち望みながら安らいでいるのだから。私たちのキリストに永遠に誉れあれ。アーメン。

（3）アンドレイ・ボゴリュプスキイ公殺害の物語

〈解説〉

アンドレイ・ボゴリュプスキイ（1110ころ－1174）は、ユーリイ・ドルゴルーキイ（手長）公とポーロヴェツ人公妃とのあいだに生まれた第２子で、1158年からウラジーミル・スーズダリの大公となった。ロシアの歴史のなかでは、ロシア国家の中心をキエフから北東に位置するウラジーミルに移し、ルーシの国をウラジーミル大公の主導のもとに統合しようとしたことで知られている。アンドレイ公は、ウラジーミルからほど遠くない自らの館において、宮廷内の陰謀にまきこまれて殺された。この事件の物語はたくさんの具体的なディテールを含んでおり、これらはのちに公の墓所の発掘調査によっても裏づけられているが、このことはこの作品の作者が事件を直接目撃したものであることを示唆している。

この物語の作者である可能性があるのは、公とその政治的路線に忠実な者であった以下の人物であると考えられる。

まずは修道院長フェオドゥラである。しかしながら、このテクストの翻刻をおこなった言語学者コーレソフは、1177年彼の指揮のもと、この物語を含む年代記集成が編纂されたことを指摘しながら、彼が物語の作者である可能性は低いと見ている。第２の候補は、アンドレイ公の侍僕であったか、あるいは、アンドレイ公によっ

てボゴリュボヴォ建設のために招聘された職人の一人（金細工師）であったキエフ人クジミシェである。第３の候補は、ヴィシェゴロドの出身で、ウラジーミルのウスペンスキイ聖堂参事会の長であったミクーラである。ミクーラは、広く知られた『ウラジーミルの聖母イコンの奇跡物語』などの作品の作者でもあり、『アンドレイ公殺害の物語』の作者としてもっとも可能性が高い。ミクーラは内争を断固否と考え、この陰謀の糸を引いた貴族層を敵視し、ウラジーミルの市民の側に立った。

作者は11世紀から12世紀にかけての南ロシア伝記文学の精神でこの作品を書いている。この作品には、ウラジーミル聖公、ボリスとグレープ伝の模倣や直接の引用が認められる。しかしながら、作者はこれらを新しいルーシの政治的中心の要求にしたがって描きなおしていることも重要である。

たとえば、ウラジーミルはキエフと比肩する町として描かれている。キエフに黄金の門と銀の門とがあったように、ウラジーミルにも同じ名前の二つの門がある。さらに、ウラジーミル－キエフ、ボゴリュボヴォ－ヴィシゴロドが対比されている。ヴィシゴロドはキエフから15キロほどドニエプル川をさかのぼったところにある町で、ロシアで最初の聖者と認定された聖ボリスとゆかりがふかく、ボリスとその弟グレープが埋葬された町でもある。あきらかにアンドレイと聖ボリス、聖グレープが類比され、政治的陰謀によるアンドレイ公の死が、無抵抗による殉教と認定されたボリスとグレープのそれと同一視されている。

『アンドレイ公殺害の物語』の完全なテクストは、『イパーチイ年代記』の1175年の項に収められている。『1177年のウラジーミル年代記集成』には、短縮され、改変された版の物語がある。この版の物語は、1377年に編纂された『ラヴレンチイ年代記』に収められている。この物語が1174年から1177年に書かれたと考える学者たちもいる。

この物語のなかには、出来事の展開に見られる世俗的で地上的な思考のラインと、公の内心の吐露や作者の注解的記事にあらわれた教会的、霊的な思考のラインとのふたつのラインが絶妙に編みあわされている。公のイメージはことさらに理想化され、そこには聖者伝文学の伝統が息吹いているが、語りにおける心理的描写の細部と生き生きとした民衆の話し言葉が物語に別の味わいを加えている。

この翻訳は、『中世ロシア文学記念碑（12世紀）（ПЛДР. XII в.）』のB.B.コーレソフによる校訂と注釈にもとづくものである。同じテクストがБЛДР. Т.IV.に再録されている。コーレソフはテクストを『ロシア年代記集成（ПСРЛ）』第２巻第２版（Т.II. Изд.2-е. СПб., 1908）から採っている。

〈翻訳〉

6683（1175）年、ユーリイの息子、ウラジーミル・モノマフの孫、スーズダリ大公アンドレイ・ボゴリュプスキイが、聖使徒の祝日の前日、７月28日に殺害された。その日は土曜日であった。

この公はボゴリュボヴォという名の石造りの町を創建した。ボゴリュボヴォとウラジーミルを隔てる距離は、ヴィシェゴロドとキエフを隔てる距離とほぼ同じだった。この敬虔でキリストを愛する公は、若年の頃から、キリストと聖なるその母を熱烈に愛し、思惑も計算も度外視して、あらゆる善良な気質で美しい魂を飾った。アンドレイ公が、主なる神の家と栄えある聖母の教会を、ボゴリュボヴォの町のまんなかに石造りで建立し、それらをあらゆる教会より美しく装飾したとき、彼はまさにソロモン王にまさるともおとらなかった。

至賢なる王ソロモンが聖なるもののなかでもっとも聖なる神殿を建立したように、この公、敬虔なるアンドレイは自らの記憶を後世に残すために教会を建立し、教会を高価なイコンと金と宝石とどれほど値がするかわからない大ぶりの真珠で飾り、さまざまな装飾をほどこし、碧玉の飾りといろいろな宝飾をしつらえた。そのまばゆさのあまり、目をあけると痛いくらいであった。というのは、この教会は黄金でできていたからである。

教会を飾り、黄金やそのほかの高価な聖具をしつらえたので、ここに来るすべての人々は驚愕し、これを見る人々はその信じられない美しさを言葉で言いあらわすことができなかった。教会は黄金、エメラルド、あらゆる宝石、教会の構造や教会の聖具によって飾られていた。金の聖具収納室にはたくさんの宝石、高価な羽板、種々の香炉が収められ、教会の壁といい柱といい、金で張りめぐらされ、教会の扉や迫持にも金箔がほどこされていた。丸屋根はてっぺんからデイスス[101]にいたるまで金で蔽われ、教会のすべての善き聖具や装飾で満たされ、あらゆる巧みで飾られていた。

アンドレイ公はウラジーミルの町を堅固に打ち建てた。ウラジーミルには、黄金の門が備えられ、別の門は銀で装飾された。実にすばらしい聖母の教会聖堂が建立され、金や銀を使ってさまざまなやり方で装飾された。教会には、金箔を張った五つの丸屋根があり、金の装飾をほどこされた扉が三つあった。高価な宝石と値はかりしれない真珠で教会は装飾され、刺繍をほどこしたいろいろな布地で飾られ、金と銀の燭台でまばゆく輝いていた。説教台は金と銀とで飾られ、聖具も羽板も教会の建物全体が金と宝石ときわめて大きな真珠で飾られていた。三つの聖具収納室はたいへん大きく、純金と高価な宝石でできていた。

その大きさと美、しつらえの豪華さは、聖なるもののなかでもっとも聖なるソロモン王のすばらしい神殿に匹

敵していた。ボゴリュボヴォでも、ウラジーミルでも金の丸屋根を建造し、建物のアーチに金箔をほどこし、壁の内面には金の下地に宝石がちりばめられており、円柱にも金箔が張られ、その表面とアーチには金の鳥が描かれ、聖具のカップもパンダンティーフ[102]も金でできており、教会のなかも教会の丸屋根全体も金で装飾されていた。

しかしながら、それだけではなく、アンドレイ公はほかの多くの教会も修道院も石造りで建立し、あらゆる教会会議、すべての教会人の心の眼をひらいた。自らの心を酩酊で曇らせることなく、修道士、修道女、乞食、あらゆる階級の人々を憐れみ深い父のように養い、神の言葉にしたがい慈愛あふれて喜捨をおこなった。神はこう仰せである。「小さき者たちに喜捨をおこなう者は、私に喜捨を行う者にひとしい[103]。」また、ダビデは言っている。「貧しき者を助け、いつも喜捨をおこなう者は幸いである。神から遠ざけられることがないからである。」

この者のなかに、勇気と知が生き、曇りない正義が彼とともに歩むのである。このアンドレイのなかには、ほかの善行もたくさん息づいており、あらゆる習慣がよき定めにかなっていた。夜に教会に入り、自らろうそくを灯してイコン画に描かれた神の像を、創造主その方を見つめるように見つめた。打ちひしがれた心で自らの姿を卑小なものとし、心から深いため息を発し、眼からは滂沱と涙を流し、ダビデをまねび悔悟の気持ちを言葉にして自らの罪を泣きながら、腐りゆくものよりも腐らざるものを、束の間あるものよりも天上のものを、過ぎ去り行くこの世の王国よりも、全能の神のもとで聖者たちとともにある王国を愛し、あらゆる善行で飾られながら、第二の賢者ソロモンになった。

アンドレイはこのような善行をおこなった。彼は毎日病人や乞食のためにさまざまな食べ物や飲み物を運ぶように命じ、自分のところにおねだりにやってくる乞食一人ひとりを見て、彼らの頼みにほどこしでこたえながら、「これはキリストがわたしを試すためにやってきたのだ」と言ったのである。そして、彼は自らのもとにくる者をすべて受け容れながら、キリストが命じたようにこう言うのだった。「小さき者たちに喜捨をおこなう者は、私に喜捨を行う者にひとしい。」この言葉をつねに心にとどめ、そのことによって、アンドレイ公よ、そなたは神からそれにふさわし勝利の栄冠を受け取ったのだった。勇気においてかの名高き二人の兄弟、ボリスとグレープに匹敵するそなたは、かの二人の聖なる殉教者のあとを歩み、自らの受難をすべて血で贖ったのだった。なぜなら、もしも不幸がなかったならば桂冠もなく、もしも苦患がなかったならば恩寵もなかっただろうから。善行をおこなって生きる者はみな、多くの敵をつくらざるを得ない。

アンドレイ公は、あらかじめ自らを殺害せんとする意図があることを知り、神のごときその魂を燃え立たせ、かかる悪だくみをものともせず、こう言った。「わが主にして神、万能なる創造者よ、そなたは自らの愛するひとり子を釘づけにされてこう言った。『かの血は彼らと彼らの裔のためである。』ふたたび聖なる福音書作者の口を借りてこう仰せである。『友のために自分の命を捨てれば、私の弟子になれる[104]。』この神を愛する公は友人のためではなく、あらゆるものを無から有へと造られた自らの創造主のために自らの魂を犠牲にささげた。このゆえに、殉教者公アンドレイよ、そなたの殺害を記憶しながら、天の軍勢は驚愕し、キリストのために流された血を見て、信仰正しき多くの民は泣く。民は、孤児たちの父にしてその養い手であるそなた、闇に覆い隠された輝きの星を見る。呪われた殺害者たちは最後の審判で炎の洗礼を受け、神はあらゆる罪の茨、すべての仕業を焼きたまう。殉教者よ、万能の神に自らの一族のために、末裔のために、ルーシの国のために、世界に平和をもたらすよう祈りたまえ。

わたしたちは本題に戻ることにしよう。

狡猾な殺害者一派は金曜日の祈祷のとき殺害を企てた。公には、ヤキムという信頼を置く従者がいた。ヤキムは誰かから、彼の兄が公によって処刑を命じられたと吹きこまれ、悪魔の教唆のために興奮し、ユダがユダヤ人たちのもとにかけこんだように、友人たち、邪悪な共謀者らのもとにあわただしく走り、自らの父サタンの気に入るように、このように言いはじめた。「今日、わたしの兄が殺される。明日は私たちの番だ。この公を手にかけようではないか。」彼らはユダが主にそうしたように夜に殺害を企てた。

夜が来ると、彼らは示しあわせて武器を取り、獰猛な獣のように出かけた。彼らはアンドレイ公の寝所にゆく途中、恐怖に捕われて震えだした。彼らはアンドレイ公の屋敷の玄関からいったんもどり、蜜酒の貯蔵庫に立ち寄って酒をひっかけた。サタンが貯蔵庫で彼らを陽気にさせ、眼に見えぬところで彼らに仕え、彼らが自らに約束したことを成し遂げることを助け、その決心を堅めた。そして、このように酒を飲んだ彼らは玄関へと入った。殺害の首謀者はクチコフ家の舅ピョートル、ヤスィ族[105]の鍵番アンバル、クチコフ家のヤキムで、このクチコフ家の舅ピョートルの指揮のもと、呪われた陰謀に加わった不正なる殺害者は総勢20人だった。この日は、聖なる使徒ペトロとパウロを記念する土曜日だった。

武器を手にした獰猛な獣たちは、至福なる公アンドレイ公が眠る寝所へと忍びこんだ。すると、彼らの一人が扉のところに立って言った。「ご主人さま、ご主人さま。」公は言った。「誰か？」男は答えた。「プロコーピイでございます。」公は言った。「おお、少年よ、そちはプロコー

ピイではあるまい。」彼らは扉に駆けよって公の発する言葉を聞き、力づくで扉を打ち壊しはじめた。至福の人は飛び起き、剣を取ろうとしたが、剣はなかった。というのも、この日にかぎって鍵番のアンバルが剣を取りあげておいたからである。その剣は聖ボリスの剣であった。

二人の殺害者が躍りでて彼に組みついた。公はその一人をほうり投げ、自分の身体のしたに押さえこんだ。もう一人のほうが公が投げ倒されたと思いこみ、暗闇のなかで自らの連れに切りつけた。そのあとで、どちらが公かがわかり、公と猛然と格闘した。なぜなら、公は力が強かったからである。剣とサーベルで斬りつけながら、殺害者どもは公に槍傷をあたえた。公は彼らに言った。「おお、なんということだ、不敬なる者たちよ。どうして、おまえたち二人はゴリャセルのように振る舞うのか。私はおまえたちにどんな悪事をしたというのか。もしもわたしの血が地に流れたならば、神はわたしのパンゆえにおまえたちに復讐をおこなうであろう。」

これら不敬の者たちは公を完全に殺したと思いこみ、自分たちの仲間をだきおこし、震えながら彼を抱えてそとに連れ出した。公は急いで彼らのあとを追い、叫んで人を呼びはじめたが、傷の痛みに耐えかねて玄関のところで壁に身体をもたせかけていた。殺害者たちはこの声を聞きつけて公のもとに戻ってきた。彼らが立ちつくしていると、一人が言った。「俺たちが立ちどまったとき、窓から俺は公が玄関に下りてゆくのを見たぞ。」殺害者たちは言った。「公を見つけ出せ。」殺害者たちは公を襲って置き去りにしたその場所に走ってもどり、彼がいないかどうか探した。彼らは言った。「今度は俺たちが死ぬ番だぞ。はやく公を見つけだせ。」彼らはろうそくの火をつけて、血痕を血まなこになって探した。

公は彼らが自分のほうにやってくるのを見ると、両手を空に差し伸べて神に祈った。「主よ、こうして私が最期を迎えることがさだめであるならば、それを受け容れます。主よ、私がたくさんの罪を犯し、あなたの教えを守らなかったとしても、あなたが慈悲深いことを私はよく知っています。私が泣くのをご覧になり、反逆者を差し向けられながらも私のほうに駆けよってきてくださいますことも。」

心の深みからため息をつき、涙にくれ、ヨブの苦難をすべて思い起こし、自らの心のなかで深く思いをこらしてこう言った。

「主よ、私は自分の人生のなかで少なからぬ罪を犯し、たくさんの悪行に耽りました。が、私に許しをおあたえください。主よ、あらゆる聖者たちと同じような死を遂げることがふさわしくない私を、どうかそれにふさわしいものにしてください。これほどの受難とさまざまな死が正しい者たちに降りかかったのです。聖なる預言者と使徒たちが殉教者の桂冠を戴きました。主にならって自らの血を流した聖なる殉教者たちと、神に見まがう師父たちがつらい苦しみを受け、さまざまな酷い死にかたをしたのです。悪魔によって惨殺されたのです。その祈りによって、聖人たちは炉のなかで黄金がそうであるように清められました。ほんとうの神の羊とともに、私を選ばれたあなたの群れに数えあげてください。聖なる敬虔なる支配者たちは、自らの民のために受難をうけいれ、血を流しました。私たちの主、イエス・キリストは自らの清らかな血によって、悪魔の姦計から私たちの安らぎを守ってくださいました。」

こう言いおえると、一息つき、ふたたび言いはじめた。「主よ、私の無力をごらんください。私の謙虚さを、私の激しい悲しみを、いま私を捕らえている悲哀を。見てください。望みをかけながら、こうしたことすべてを耐えさせてください。主よ、私はあなたに感謝します。あなたは私の魂を鎮めてくださいました。私をあなたの王国の相続人にしてください。そしていま、主よ、あの者たちが私の血を流すならば、私をあなたの殉教者の仲間に入れてください。」

彼はこう言いながら、自らの罪を許してくださるよう神に祈りながら、階段の円柱に寄りかかっていた。敵たちは長いあいだ探し回っていたが、公が無垢な子羊のように座っているのを見つけた。呪われた者たちは殺到して止めを刺し、ピョートルは彼の右腕を切り落とした。公は空を見上げて言った。「主よ、あなたの御手にわが魂を捧げたてまつります。」このようにして、彼は永遠の眠りについた。土曜日の深更から明けて日曜日、聖12使徒の日の薄明にかけての出来事であった。

呪われた者たちはここから一度戻って、公がこよなく愛した侍従、プロコーピイを殺し、そこから、屋敷のなかに入り、金、宝石、真珠、あらゆる装飾品、公のお気に入りの品々を手当たりしだい掻っ攫った。公の駿馬に荷物をのせて、夜が明ける頃までにはめいめいの家に運び去った。

そして、彼ら自身が公の大切な剣をふりかざし、従士たちを呼び集めて言った。「ウラジーミルから従士隊が私たちを討つために到着するのを待つべきであろうか？」そして、軍勢を集まると、ウラジーミルへ遣いが出された。「私たちに対して何か企てがあるのか。私たちはそなたたちと手をむすびたい。企てをおこなったのは私たちだけではない。そなたたちのなかにも賛同者はいるはずだ。」ウラジーミルの者たちは言った。「誰がおまえたちの賛同者だというのか。おまえたちはおまえたちで勝手にやるがよい。私たちを巻きこむな。」すると、彼らはちりぢりに散って略奪に出かけた。見るも恐ろしい惨状であった。

そこにキエフの住人、クジミシェが飛びこんできた。「おお、公はもういない。殺されたのだ。」そして、この

クジミシェは問いただしはじめた。「どこで公は殺されたのか。」彼らはこう言った。「庭に引きずりだされて、そこに放り出されている。が、遺骸を持ち去ることは許されぬ。私たちは遺骸を犬に食わせることに決めたのだ。もしも彼に近寄る者があるならば、その者は私たちの敵として殺す。」

クジミシェはアンドレイ公を思って泣きだした。「私のご主人さま、どうして、あなたは、けがらわしい不敬なる敵を、我が身に害をおよぼそうと近づく敵を見抜くことができなかったのですか。かつて異教徒ブルガール人を相手に負けることを知らなかった[106]あなたが、どうして彼らを打ち負かす機転をもたなかったのか。」クジミシェはこのように泣いた。

ヤスィ族出身の鍵番、アンバルがやってきた。この者は公の屋敷のすべての鍵をもっていた。公はこの者にほかのすべての者たちにまさる権力をあたえていた。この男の姿を見てクジミシェは言った。「アンバル、盗賊め。私たちのご主人さまの遺骸をくるむ絨毯か何かをもってくるがよい。」アンバルは言った。「向こうへ行け。俺たちは遺骸を犬に食わせるのだ。」クジミシェは言った。「おお、異教徒め。もう犬どもに食わせているではないか。ユダヤ人め、おまえがどんななりでここに来たか、覚えているか。今は、おまえが絹の着物を着て立ち、公が裸で横たわっている。だが、私はおまえに頼む。私に公をくるむものをあたえてくれ。」この男は絨毯とマントを投げてよこした。クジミシェは遺骸を絨毯とマントでくるみ、教会に運びこもうとして言った。「教会を開けてくれ。」彼らは言った。「教会の入り口に放り出しておけ。こんどはおまえに災難が降りかかるぞ。」この連中はすでに酔っ払っていたからである。

クジミシェは言った。「ご主人さま、あなたの僕たちはもうあなたのことを知りません。ツァリグラードから客を迎えることもしばしばでした。ほかの国からも、それから、ルーシの国からも。客はあるいはカトリック教徒であり、あるいはほかのキリスト教徒であり、あるいは異教徒だった。客を迎えたとき、あなたは言ったものです。『客人を教会に、宮殿にお通しせよ。ほんとうのキリスト教がどんなものかがわかるだろう』と。ブルガール人が、ユダヤ人が、そのほかの異教徒たちが神の誉れと教会の装飾を見て洗礼を受けました。あなたのことを思って彼らは泣いています。この者どもはあなたを教会のなかに運びこむことを禁じているのですから。」

このようにアンドレイ公の遺骸はマントに蔽われて教会の玄関のところに二日二晩放置されていた。三日目にクジマ・デミヤン修道院院長のアルセーニイがやってきて言った。「私たちは長いあいだ年長の修道院長を待っていたが、この公の遺骸はここにずっと横たわったままだ。教会の扉を開けなさい。私が公のために祈祷歌を歌い、遺骸を柩に納めるだろう。この騒乱がおさまったら、ウラジーミルから人が来て公の遺骸をそちらに運ぶだろう。」すると、ボゴリュボヴォの合唱隊が来て遺骸をかつぎあげ、教会のなかに運びこみ、石の柩に安置し、アルセーニイ修道院長とともに遺骸のうえで追悼の祈祷歌を歌った。

ボゴリュボヴォの住人たちは、公の屋敷と、建設のために来ていた建築家たちを襲い、金、銀、衣服、織物、公のもとにあった数限りない財産を略奪した。アンドレイ公の領地も略奪にあった。市長、領地管理人の家も強奪された。彼らの身内もその子どもたちも襲撃された。屋敷の護衛たちも殺され、彼らの家も略奪された。「法のあるところには、多くの不当な仕打ちがある[107]」と仰せられた方を知らないのである。略奪者たちは村からもやってきた。ウラジーミルでも同様に略奪がおこなわれたが、ミクーラが聖母の服装をして町を歩きまわるまで[108]、劫略行為はやまなかった。使徒パウロは書いている。「あらゆる魂は権力にしたがう[109]。」なぜなら、権力は神によってさだめられているからである。ツァーリは地上の本質において人間に似ているが、力として位階は神のようである[110]。偉大なる金口ヨハンネスは言った。「権力に反抗する者は、神の掟に反する者である。公が剣を携えているのはゆえのないことではない。なぜなら、公は神の僕だからである[111]。」

私たちは前の部分に戻ろう。

六日目の金曜日、ウラジーミルの住人たちは修道院長フェオドゥルと聖母教会の合唱隊長ルカに言った。「担架を用意しなさい。私たちが出かけ、公、私たちの主人アンドレイ公を連れもどそう。彼らはミクーラに言った。「司祭たちを集めるがよい。みなに法衣をまとわせよ。おまえたちは聖母イコンとともに、銀門[112]をでるがよい。そこで公が運び出されるのを待つのだ。」

そして、ウラジーミルの聖母修道院の修道院長フェオドゥルはこのようにした。彼は合唱隊とウラジーミルの住民たちをしたがえて、ボゴリュボヴォの公のもとにゆき、その遺骸をだきおこし、丁重に大いなる嘆きとともにウラジーミルへ運んできた。

しばらくして、ボゴリュボヴォから葬列が進みはじめると、人々は我慢することができず、みなが叫びだし、涙にかきくれてものが見えなかった。彼らの泣き声はずっと遠くまで聞こえた。号泣しながら、民は口々に叫びはじめた。「ご主人さま、そなたはキエフに行くことはもはやないだろう。黄金の門のうえにそびえるウラジーミルの教会、聖なるそなたが建造するように命じ、ヤロスラフの大きな宮殿の敷地のなかにあるこの教会のなかに、そなたは葬られるだろう。この教会を建てるとき、そなたは『黄金の門を建立したように、この教会を建てるだろう。私の祖国全体の記念になるように』と仰

せられたのだ。」このように、町中の人々がアンドレイ公を思って泣き、彼の遺骸を隠し、敬虔なる気持ちをもち、神を讃える歌を歌いながら、丸屋根の黄金がきらびやかな、奇跡のほめたたえられるべき教会、アンドレイ公自身が建立したかの教会に、その遺骸を葬ったのである。

見よ、アンドレイ公は生きているあいだ、自らの身体に安息を、自らの目に眠りをあたえなかった。そして、ついに真実の住みか、あらゆるキリスト教徒の隠れ家を見出したのである。天のあらゆる位階の女王さま、全宇宙の女主人さまは、さまざまな道筋によって、すべての人間を救済に導く。使徒はこのように教えている。「主は愛する者を罰します。受け容れている者を打たれます。罰を耐え忍びなさい。神はあなたがたを子どもと見なしている[113]。」なぜなら、神は、すばらしき太陽を同じ場所にほうっておきはしないのだから。神がそこから宇宙全体を照らしだすことができるように。神は太陽を東、南、西と動かすのである。

かくのごとく、神が自らのお気に入りの者、アンドレイ公をおそばに召されたのはゆえのないことではなかった。アンドレイ公はかかる生き様によって魂を救済し、自らの血で自らの罪を贖い、二人の兄弟、ロマンとダヴィド[114]と同じ魂をもって神キリストのもとに馳せ参じたのである。アンドレイ公はこの二人の兄弟とともにものいわず天国の恵みのなかにやすらっているのである。この光景をふつうの人間は眼で見られないし、耳で聞こえないし、心で感じることもできないが、偉大なる公アンドレイよ、そなたは神を愛する者たちのために神が用意されたこの恵みを見ることができ、それを永遠に喜ぶのである。アンドレイ公よ、勇気をもって、全能の、豊かな者のなかでもっとも豊かな、高き玉座にまします神に、自らの兄弟を憐れみたまえと願い奉りたまえ。兄弟たちに敵に対する勝利をあたえ、平和な王国と栄えある長年にわたる統治がありますように。永遠にとこしなえに。アーメン。

（4）トヴェーリ公ミハイル・ヤロスラヴィチ伝

〈解説〉

トヴェーリ公ミハイルの聖者伝は、中世ロシア文学のなかで特異な場所を占めている。ロシアで最初の聖者であるボリスとグレープにまつわる一連の作品[115]をはじめ、中世ロシアでは殺人事件を素材とした聖者伝文学の伝統があるが、この作品もそうした伝統に連なる。

この文学的伝統においては、主人公の死の場面が微に入り細にわたって叙述されるいっぽうで、主人公の生前の所業はまったく描かれないか、きわめて一般的に図式的に描かれるにすぎなかった。また、はっきりと定式的に規定された政治思想とそれと結びついた宗教思想が前景化するのもその特徴である。たとえば、ボリスとグレープにまつわる作品群においては、公位継承における兄弟間の上下関係の尊重という政治思想が、悪のまえにおける無抵抗という宗教思想と結びついていた。『チェルニーゴフ公ミハイル伝[116]』においては、モンゴル・タタール支配へのチェルニーゴフ公ミハイルの反抗という政治的テーマが、キリストとキリスト教信仰のための受難という宗教的テーマと不可分につながりあっている。

『トヴェーリ公ミハイル伝』においては、「自らの仲間のために自らの魂を投げ出す」という福音書的なテーマが、作品のライトモチーフになっている。この思想は、宗教的側面だけではなく、政治的な側面においても独自の意味づけをもっていた。いっぽうで、個々のキリスト教徒のために自らが犠牲となってモンゴル・タタール勢力と戦ったトヴェーリ公ミハイルの姿は、ヒューマンな格調高いパトスに貫かれている。また同時に、この作品は、モンゴル・タタールのくびき時代に台頭したルーシの２大勢力、モスクワとトヴェーリの確執を克明に描き出すドキュメンタリーの性格をもっている。両勢力の確執は、17世紀にいたるまでさまざまなジャンル、さまざまな時代で多様に描かれることになったが、この作品はその嚆矢となった。

『トヴェーリ公ミハイル伝』について包括的な著作をもつB.A.クーチキン[117]によれば、この作品は殺害事件の直後の1319年末から1320年はじめにかけて、トヴェーリのオトローク修道院院長アレクサンドルによって書かれた。アレクサンドルは、トヴェーリ公ミハイルにとって死出の旅路となったハーン国行に懺悔聴聞司祭として同行した。

『トヴェーリ公ミハイル伝』は中世ロシアにおいて絶大な人気を博し、たくさんの写本に残されている。この聖者伝は何度となく改作され、新しい編纂本がつくられ、年代記などに再録された。クーチキンが示したように、オリジナルのテクストにもっとも近いものが、当初年代記におさめられたものではなかった拡大版編纂本であり、本翻訳が参照した『中世ロシア文学図書館（БЛДР）』第6巻もこの編纂本を底本としている。この編纂本は、16世紀末から17世紀初めに作成されたと考えられるM.Ф.ペルシナ集成７番写本505葉裏－530葉裏 Коллекция М.Ф.Першина. №7.лл.505об.-530об.（ロシア科学アカデミーロシア文学研究所 ИРЛИ РАН マールイシェフ名称古文書館所蔵）に収められている。

〈翻訳〉

6800年（1292年）[118]　キリストを愛する敬虔なる大公ミハイル・ヤロスラヴィチの殺害　11月22日

祝福したまえ。父よ。

たくさんの花によって編まれた王冠は、ありとあらゆる飾りと色とりどりの花々によって、それを目で見る者たちに大いなる喜びをあたえる。なぜなら、一本一本の花は自らの姿かたちによって自らに視線を集めるからである。あるものは白い色によって輝き、あるものは赤や紫の色に秀で、それぞれがたいへんきわだった姿をもっている。しかしながら、そうした花々がひとつところに集められると、たくさんのかぐわしい香りが混じりあい、たぐいまれな芳香をはなって、正しい人々の心から悪臭を取り除くのである。ただお一方の神に対する熱烈な思いをもち、その神のお気に召すように必死に努め、高きエルサレムに達してそれを見る。そうした方々の暮らしのたたずまいこそが花々である。

そういう方々は身体の病を見くだし、荒れ野や山のなかで、あるいは、洞窟にこもって自らの体を疲れさせ、王冠、緋色の帝衣、自らのつかのまの王国でのあらゆる位階を捨て、それらの見返りを期待することなく、ただお一方キリストだけを心のなかで愛し、朽ち果てることのない王国をこそ望み、桎梏、縛獄、受傷の辱めに自らの身体をゆだね、最後の最後に自らの血を流し、天の王国と萎れることのけっしてない王冠を受けとった。

知力においてたくましく、魂において忍耐深いこの至聖なるキリストを愛する大公ミハイル・ヤロスラヴィチは、自らの王国を何ほどでもないと思いなしてこれを捨て去り、ひどい責め苦を甘受し、自らの配下の民のために自らの魂を差し出し、主の言葉を心に留めていた。主は仰せである。「友のために自分の命を捨てるならば、この者は天の王国で尊きものと見なされる[119]。」ミハイル公は聖書のこの言葉に若い頃から親しみ、何とかして殉教を遂げようとそれを心に秘めていた。私たちはこのことを誰かほかの人々から聞いたのではなく、私たち自らが、その敬虔なたしなみ、成熟した善良な気質、理性と叡智によって神を求める彼の情熱の目撃者だったのである。

この至福の大公、ミハイル・ヤロスラヴィチを忘却のかなたに追いやるのはふさわしいことではない。正しい教えという燭光のなかにこそおくべきである。神のように叡智に恵まれたこの公の生涯の光を、その忍耐を、その最期の受難をすべての人がみることができるように。けっしてかすむことのない恩寵が、自らの思いかしこき心の光となって、光芒をはなつように。私は粗野で無学であるが、自らの主人への激しい愛に身を焼かれている。私は、自らの主人のタラントンを地中に隠し、それが何倍にもなるようによき商人に貸しあたえようとしなかった、あの怠惰な奴隷の二の舞になることを恐れている。だが、ふたたび私は自らの粗野な気質におそれ慄いている。どうやったら私は多くのことから少しだけを書きおこし、聖なるキリストの戦士、大公ミハイル・ヤロスラヴィチがその末期におよび、耐え忍んだ受難をひとびとに知らしめることができようか。それは私たちの時代、つい先ごろ起こったばかりの出来事なのである。それでは、まず祈りをささげることからはじめよう。

「高き方、主イエス・キリストさま、私に知力と叡智をおあたえください。私の唇を開かせてください。私の唇があなたの誉れを広く響きわたらせることができますように。あなたの聖なる僕の功業を私があまねく知らしめることができますように。」

私たちの主、神のロゴスたるイエス・キリストは終末の日々、いと清き処女、聖母マリアから生まれ、受難をこうむり、堕落した人類を矯められ、三日ののち復活し、昇天した。50日目に主、私たちの主である神が自らの聖霊を使徒たちに遣わされると、使徒たちは諸国をめぐり歩いて教えを広め、父と子と聖霊の名において洗礼をほどこし、自らのなかに総主教、府主教、主教、司祭らを叙聖しはじめた[120]。主なる慈悲深き神は、自らの神慮によってルーシの大公ウラジーミル[121]を洗礼へと導いた。このときから、聖なる信仰があまねく地に広まり、あらたに洗礼を受けた人々のあいだで歓喜と大いなる喜びがわきあがった。

これらの人々に打ち負かされた悪魔だけがひとり嘆き悲しんでいた。悪魔はかつてこれらの人々によって敬われ、供犠を受け、誉めそやされていたのである。悪魔はこれに我慢できず、私たちの魂を誘惑することを思いつき、私たちの魂が正道を踏みはずすように悪だくみをはじめた。悪魔は私たちの魂に羨望や憎悪を吹きこみ、兄弟殺しをするよう唆した。子が父から、弟が兄から、財産を奪いはじめ、人間たちのあいだで不正が増し、悪が殖え、はかなくすぎゆくこの世の弱さに我が身を任せはじめた。憐れみふかい主なる神は、私たちの種が悪魔のために死に追いやられるのを見るに忍びず、私たちを悪から遠ざけるために、罰を用いて私たちを制止しようとした。私たちに懲罰を送ったのである。あるときは飢饉、あるときは人間や家畜の死を。そして、最後に私たちをイシュマエルの子[122]らの手へとゆだね、破滅させたのである。そのときから、私たちはタタール民族へと貢税を納めはじめた。私たちの公の誰かが大公位を受けるときには、ルーシの公はたくさんの自らの財産を携えて金帳汗国のツァーリ[123]のもとに行ったのである。

大いなる過酷な囚われの境遇に陥って34年の時がすぎた[124]。この聖なる、永遠に記憶されるべき神に愛された大公ミハイルは、大公ヤロスラフ[125]の息子であり、キリスト教徒のために金帳汗国で非業の死を遂げた、聖なる大公ヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ[126]の孫であった。大公ミハイルは聖なる、真に神にもまがう母、大公妃クセニア[127]から生まれた。この聖なる至賢の母は、彼を主への畏れのなかで生み育て、聖なる書物を教え、あらゆる叡智を授けた。

この公は自らの世襲領地で公として統治しているとき、トヴェーリで大公アンドレイ[128]が逝去した。アンドレイは、このキリストを愛する大公ミハイルを祝福して、自らの玉座に即けた。ミハイルこそが長幼の順で大公の位を得たのである[129]。彼は金帳汗国のツァーリのところにいった。なぜなら、彼より以前の公たちは、かの地に行って大公位を受ける慣わしになっていたからである。

同じとき、彼の甥ユーリイがハーン国に出立した。彼がウラジーミルにいたとき、聖なる記憶に値する全ルーシの府主教マクシムがおおいに彼に懇願し、ハーン国に行くことに反対してこういった。「私がミハイル公の后と母とともに人質になりましょう。また、世襲領地のなかであなたがお望みになるものをあなたに差しあげましょう。」彼は約束していった。「私がハーン国にいったとしても、大公位を求めることはいたしますまい。」

ユーリイ公がハーン国にいたとき、キリスト教徒によきことを望まぬ悪魔は、タタールの公たちの心にわるい考えを吹きこんだ。タタールの公たちはユーリイ公が兄弟とのあいだに争いごとをするようにしくみ、ユーリイ公にこう言った。「そなたがミハイル公よりも多くの貢税を納めるというならば、そなたに大公位をあたえよう。」このようなわけで、彼らはユーリイ公に心変わりをさせたので、彼は大公位を求めはじめた。兄弟たち、ルーシの公たちのあいだに争いごとの種をまき、たくさんの貢物を絞りとろうとするのは、今日にいたるまで邪教徒たちのやり方である。

ミハイル公とユーリイ公とのあいだに大いなる軋轢が生まれ、私たちの無法と罪のためにルーシの地にひどい災難がふりかかった。このことについて預言者はいっている。「おまえたちが私に向かい、おまえたちの悪から足を洗うならば、私はおまえたちの公たちの心に愛を置くであろう。もしもおまえたちが悪しき習慣をやめず、自らの無法を悔いあらためないならば、あらゆる懲罰によっておまえたちに目にもの見せるであろう。」しかし、いと清らなる聖母とあらゆる聖者の憐れみによって、敬虔なる大公があらわれ、ウラジーミルの聖母のもとで、聖なる神のごとき全ルーシ府主教マクシムの手で、ミハイル公は自らの祖父と父の玉座に据えられたのである。

そして、一年間ミハイル公は大公位にいたが、ちょうどそのころ、オズベクという名の別のツァーリが即位した。神はサラセンの教えが唾棄すべきものであるとご覧になり、そのときからキリスト教徒を憐れまなくなった。そのような者たちについて、バビロンで虜囚の身にあった王の子らは言った。「神は私たちを仮借ない、無法で、この地上でもっとも狡猾な王の手にわたした」と。主がティトゥス[130]にエルサレムをわたしたとき、それはティトゥスを愛していたためではなく、エルサレムを罰するためであった。また、フォーカス[131]にツァリグラード[132]をわたしたときも、フォーカスを愛したわけではなく、人々の罪ゆえにツァリグラードを罰したのである。しかしながら、私たちは実際に起こったことを物語ることにしよう。

このときから、この二人の公のあいだで敵意がはじまった。彼らのあいだで何度も和議が結ばれたが、悪魔がふたたび二人を争わせた。そして、公たちがハーン国にいたとき、両者のあいだに大いなるもめごとが生じた。タタール人たちはハーン国にユーリイ公をとどめおき、ミハイル公をルーシに帰した。そして、一年が過ぎた。ふたたび無法なるタタール人たちはわたされた賄賂に満足ができずに、富だけを望み、多くの銀をとってユーリイ公に大公位をあたえ、ルーシの地に彼とともに自らの公の一人である無法で幾重にも呪われたカフガドゥイを遣わした。至福なる大公ミハイルは自らの兵士たちとともに彼を迎え、ユーリイ公に遣いをやってこう言った。「兄弟よ、もしも神とツァーリがそなたに大公位をあたえたのなら、私はそなたに大公位をゆずろう。だが、私の領地に足を踏み入れてはならない。」彼は自らの兵を解散させ、一族郎党を引き連れて自らの領地に入った。

悪魔はふたたび鎮まらず、流血の惨事を望んだ。それは私たちの罪のために起こったのである。ユーリイ公はスーズダリの全土を統一し、軍勢を率いてトヴェーリにせまった。吸血鬼カフガドゥイとともに多くのタタール兵、イスラーム教徒、モルドヴァ人たちがいて、町々や村々を焼きはじめた。大いなる惨禍と悲しみがあった。というのは、彼らは男たちを捕らえ、ありとあらゆる傷を負わせて苦しめ、拷問したり殺したりしたからである。また、この異教徒たちは女たちを辱めた。そして、ヴォルガ川にいたるまでのトヴェーリの諸郷は焼かれ、ヴォルガの対岸にわたり、そちら側でも同じことをした。

至福なる大公ミハイルは自らの主教、公たち、貴族を呼び、彼らに言った。「兄弟たちよ、私は自らの若き弟に大公位を譲り、貢税を支払った。だが、どうだ、それからのち、私の領地にどれほどの悪がなされたか。私はこれらすべてに耐え、悪行が止むことを望んだ。だが、いまやこれらの輩の狙いは、私の首を獲ることだと知った。いまや私は逃げも隠れもしない。どんな点でわが弟にたいして私に罪があったのか、そしていま罪があるのか、私に告げてみよ。」

彼らは異口同音に涙を浮かべてこう言った。「ご主人さま、あなたはあらゆる点において自らの甥御たちのまえで罪がありません。あなたは謙虚な気持ちで万事にあたられた。にもかかわらず、かの弟御はあなたの領地を奪い、あなたの領地の対岸側でも同じことをなさろうとしている。ご主人さま、いまや彼らに向かって立ちあがりなさい。私たちはあなたさまのために自らの命をかけてたたかう所存でございます。」

至福の大公ミハイルは大いなる謙譲の心をもって言った。「兄弟たちよ、聖なる福音書が何を言っているか、お聞きなさい。みずからの近しい者たちのために自らの命をかける者は、天の王国において大いなるものとされるであろう。私たちが命をかけるのは、たった一人の人間のためでも、二人の人間のためでもない。どれだけの人々が囚われの身となり、どれだけの人々が殺され、その妻や娘たちが異教徒たちによって辱められたことか。いまや私たちはこれらたくさんの人々のために、主の言葉が救いとなるよう自らの命をかけるのである。」

彼らは敬虔なる十字架によって心を確固として保ち、敵の軍勢に向かって出陣した。敵勢に近づいてみると、敵の軍勢が無数にうごめいているのが見えた。両方の軍勢が遭遇すると、激しい斬り合いがおこった。敵勢は戦闘をつづけることができずに敗走した。聖なる救世主とその清らかなる母の慈悲と偉大なる大天使ミハイルの助けによって、大公ミハイルは勝利した。数知れぬ戦士たちが傷ついた馬の下敷きになって、畑で刈り取られた穀物の束のように斃れていた。

ユーリイ公は自らの軍勢が群れのなかの鳥のように動揺しているのを見てとると、小勢の従士たちをともなってトルジョクにのがれ、とるものもとりあえずそこからノヴゴロドに向かった。大公ミハイルは呪われたカフガドゥイを殺すように命じた。この男のために一連の痛ましい惨劇がおこったのであるから。

この勝利は12月22日、木曜日、聖なる殉教者アナスタシアの日の夕方に起こった。大公ミハイル自身は身につけた鎧兜すべてが傷だらけになっていたが、身体にはかすり傷ひとつ負っていなかった。至福なる預言者ダビデは言った。「あなたの傍らに一千の人、あなたの右に一万の人が倒れるときすら、あなたを襲うことはない[133]。あなたには災難がふりかかることはなく、あなたの身体が傷つけられることはない。主はあなたのために御遣いに命じて、あなたの道のどこにおいても守らせてくださる。彼らはあなたをその手に乗せて運ぶ[134]。」このとき、ミハイル公は大天使ミハイルによって守られていたのである。

ミハイル公は汚らわしい異教徒たちの手に落ちた多くの人々を虜囚の身から救い出した。彼らは大いなる喜びとともに自らの祖国に帰った。呪われたカフガドゥイを自らの屋敷に連れ、丁重に扱い、贈り物をもたせてその屋敷に返した。カフガドゥイは嘘偽りをもってツァーリに讒言しないと繰り返し誓った。彼は言った。「私はツァーリの命令なしにあなたの領地を武力で奪おうとしたのだから。」

ユーリイ公はたくさんのノヴゴロド人、プスコフ人たちを糾合してトヴェーリに迫った。敬虔なる大公ミハイルはシネエフスコエ村の対岸でユーリイ公を迎え撃った。これほど短い期間に、ふたたび流血の惨事が起こることを双方が望まず、両軍は兵を引き、十字架に接吻した。そして、至福の公ミハイルは言った。「兄弟よ、私たち二人がハーン国に出かけ、なんとか私たちがこれらキリスト教徒たちのためになるよう、ツァーリに嘆願しよう。」

ユーリイ公はカフガドゥイとともに一足先にハーン国に出立した。彼はスーズダリの公、諸都市やノヴゴロドの貴族を従えていた。ユーリイ公の命令によって、呪われたカフガドゥイはたくさんの嘘を書きたて、至福のミハイルについて偽りの証言をした。

ミハイル公は自らの息子コンスタンチンをハーン国に派遣しており、自らは息子コンスタンチンのあとにハーン国に赴いた。トヴェーリの主教ヴァルスノフィイ[135]のもとで、修道院長たち、司祭たち、自らの懺悔聴聞僧、修道院長イワン[136]から祝福を受けた。ネルリ川の河畔で何時間も最後の告解をおこない、魂を清めながら言った。「父よ、私はどうやってキリスト教徒の助けとなればよいか、つねづね考えてきた。しかしながら、私の罪のゆえにいっそうの惨事が起こっている。さあ、私を祝福してください。もしもそれが運命ならば、私はかれらのために私の血を流しましょう。もしもこれらキリスト教徒たちが少しでも安らぎを覚えることができたなら、主が私の罪を許してくださいましょう。」

高貴なる公妃アンナとその息子ワシーリイがこの場所まで彼を見送り、号泣しながら彼のもとから帰った。彼らは目から川のごとく涙を流し、自らの愛する公と別れの言葉を交わすことができなかった。ミハイル公はウラジーミルに行った。ツァーリからの使者が来て言った。「ツァーリがそなたをお呼びである。ただちに１ヶ月以内にツァーリのもとに出頭するがよい。もしも出頭しないならば、ツァーリはそなたの町に軍勢を送るよう命ぜられた。カフガドゥイがツァーリに『ミハイルはハーン国に来ないでしょう』と讒言したのだ。」

知力において秀でたミハイル公は謙虚な気持ちで言った。「子らよ、見るがいい。ツァーリが求めているのはおまえたちでもなく、私の子どもたちでもなく、ほかならぬ私の首だ。もしも私が逃げ隠れしたならば、私の領国はことごとく破壊され、人々は奴隷にされ、その後私には死が待っている。たくさんの人々の命のために、いま自らの命を犠牲にすることを私は望んでいる。」

彼は神を愛する尊い偉大なキリストの殉教者デメトリオスのことを引き合いに出して、彼が自らの領国であるテッサロニキについてこう言っていると言った。「主よ、もしも彼らを殺すのなら、私も彼らとともに死にます。もしも彼らをお救いになるならば、私も彼らとともに救われましょう。」このミハイル公は同じようにふるまった。彼は自らの魂を祖国のために犠牲にしようと決め、

自らの血で多くに人々を死とさまざまな不幸から救ったのである。この人はふたたび自らの子どもに柔和さ、智恵、謙虚さ、叡智、勇気、そのほかのあらゆる勇敢な行為について多くのことを教え、自らの聖なる習慣にならうように命じた。涙を累々と流しながら彼は多くの人々と接吻をかわし、彼と彼の聖なる顔から発する天使のような眼差しの美しい輝きから目をはなすことができなかった。彼の蜜流れる説教を聞いて聞き飽きることもなかった。彼らが涙にくれ、すっかりふさぎこんで別れを告げると、彼らに贈り物をあたえて祖国に返し、文書を書いて自らの領地を彼らにわけあたえた。

彼は9月6日、大天使ミハイルの奇跡の日に、ドン川がアゾフ海に流れこむ河口付近にあったハーン国宮廷へと到着し、彼の息子であるコンスタンチン公が彼を出迎えた。ツァーリは彼に監視人をつけた。誰かが彼を侮辱することがないようにするためである。最初は彼らの言葉は香油よりも優しかったが、そのあとそれは弓矢にも等しくなったのである。彼はハーン国の公や帝妃に贈り物を届け、そのあとツァーリにたいして貢物を贈った。

ミハイル公は半月のあいだハーン国にいたが、そののちツァーリは自らの公たちに言った。「そなたたちはミハイル公について何と讒言したか。ユーリイ公とともに裁判を開こうではないか。真実を述べていると認めた者には顕彰をおこなおう。罪ありと認めた者は死刑に処そう。」呪われたる者よ、そなたたちは処刑を企むことによって、ミハイル公のために美しく輝く桂冠を編んだことを知らないのか。

ある日、ハーン国の廷臣たちが宮廷に集合し、ひとつの天幕のなかに座し、至福なる公ミハイルにたいする捏造された告発を含む多くの文書を持ちだした。それにはこう書いてあった。「そなたは私たちの町々で多くの貢物をまきあげたが、それをツァーリにわたさなかった。」真実なるキリストの殉教者であったミハイルは真実を愛し、あらゆる誠実な心をもってかれらの嘘の証言を非難した。そうした裁き手について、こう言われている。「私は支配者をたてる。かれらを罵り、裁き、憐れみの心をもたぬものだ[137]。」するとどうであろう、あの不敬なるカフガドゥイ自身が裁き手となり、裁きをおこないながら虚偽のうわさをまきちらし、自らの嘘で誠実なるミハイル公の真実の言葉を覆い隠したのである。カフガドゥイは自分の咎をたくみに言い逃れしながら、至福なる罪なきキリストの戦士ミハイルについて偽りの告発をおこなった。

この裁判のあと、一週間がすぎた。土曜日のことだった。ふたたび不敬なる者たちから無法なる命令がくだった。至福のミハイル公を縛りあげて別の裁判にかけ、彼に不公平な裁きをくだしたのである。彼らはこういった。「おまえはツァーリへの貢税を上納しなかった。おまえはあえて私たちに反抗的な態度をとった。おまえはユーリイの公妃を殺害する[138]ように命じた。」敬虔なる公ミハイルは多くの証拠を挙げて言った。「私はこれほどの宝物をツァーリに貢いできた。そのすべては書き留められている。」戦場でツァーリの使者を死から救い、丁重にあつかい解放した。后妃にかんしては、神が証人になってくださる、企みがあって私がそのようにしたのではない、と言った。

ところが、彼らはじつに無法なる者たちであった。預言者によって「耳があっても真実を聞かず、口があっても話さず、目があっても見ない[139]」と言われているとおり、敵意が彼らを盲にしていたのである。彼らは聖なる者の言葉にすこしも耳を傾けようとせず、自分たちのあいだでこう取り決めた。「縄目の屈辱によって彼を縛りあげよう。みっともない死にかたをさせて彼を裁こう。なぜなら、彼は私たちの気に染まないからだ。彼はわたしたちの習慣に従わない者である。」

彼らは悪行を望み、じっさいそのとおりにしたのである。その夜、七人の公の七人の番人が彼を見張っていた。ほかにも少なからぬ者たちがおり、至福なる者たちのまえに鉄の枷を積みあげ、彼の足にその枷をつけようとした。彼の身につけているものから好きなものを剥ぎとり、自分たちのあいだで山分けにした。その夜、彼から鉄の枷がはずされることはなく、彼は縛られたままでまる一晩をすごした。その夜、ミハイル公の従士たちはみな彼のもとを追われ、手ひどく打たれ、彼の聴罪司祭である修道院長アレクサンドル[140]も遠ざけられ、ミハイル公はただひとり彼らの手のもとに残った。ミハイル公は言った。「彼らは私の従士たちを私から引き離し、私に近しい者たちを私の苦患から遠ざけた。」

翌日の日曜日、無法な者たちの命令で、重い木でできた大きな棒が聖なる者の首にくくりつけられ、屈辱的な苦患を引き受けなければならないことをこれ見よがしに示したのである。ミハイル公はこれを受けいれつつ、喜びと涙で主なる神に感謝をささげて言った。「人間を愛する主よ、そなたに栄えあれ。なぜなら、そなたはわたしをたった今はじまった苦患を受けるのにふさわしいものとなさり、私をご自身の功業を受け容れ、完成させるのにふさわしいものとしてくださったのだから。奸知に長けた者たちの言葉が私を唆すことがありませんように。不敬なる者たちの恫喝が私をおびえさせることがありませんように。」

そして、無法なる者たちは聖なる人にツァーリのあとを歩かせた。ツァーリは狩りに出かけたのである。至賢にして敬虔なる大公ミハイルは、幼いころから夜にダビデの詩篇をうたう習慣をもち、この決まりを違えることはけっしてなかった。ウラジーミルを出てからというもの、日曜日から次の日曜日まで斎戒し、主の身体と血を

拝領した。囚われの身になって以来、いっそう熱心にたえまなく目を見開き、眠らなかった。彼自身が眠りこまず、彼の守護天使がまどろむことがないようにするためである。ミハイル公はふたたび神を讃え、たくさんの涙を流し、深いため息をついて神に罪を告解して言った。

「主よ、私の祈りを聞いてください。この叫びがあなたに届きますように。苦難が私を襲う日に御顔を隠すことなく、御耳を向け、あなたを呼ぶとき急いで答えてください。私の生涯は煙となって消え去ります[141]。」さらに、「神よ、私を救ってください。大水が私の魂に達しました。私はここ、海の深みに沈みました。まるで嵐のように私は沈められました。理由もなく私を憎む者はこの頭の髪よりも数が多いのです。かつて私のパンを食み、私の愛を受けた者たちは、いまや私の敵となり、いわれもなく私を責めさいなみます[142]。」

夜、無法なる見張り人たちは聖なる者の手を木の棒に打ちつけたが、このように責めさいなまれても詩篇を歌うことをやめなかった。一人の少年が傍らに座り、書物をめくりつづけたのである。ミハイル公は熱心に言った。「主よ、あなたの僕から御顔を隠すことなく、苦しむ私に急いで答えてください。私の魂に近づき、私の敵から解放してください。あなただけが私の心を、恥を、屈辱をご存知です。真実なく私を苦しめる者は、すべてあなたの御前にいます。私とともに悲しみ、私を慰めてくださるのは、主よ、あなた以外にはおられません。あなたの憤りを彼らにそそぎ、激しい怒りで圧倒してください。

無法なるカフガドゥイよ、なぜそなたは自らの悪意を誇り、毎日、私に悪巧みをしかけるのか。そなたの舌は研いだかみそりのように鋭く、嘘を好み、善よりも悪を愛す[143]。そなたは私からたくさんの貢物を受け取ったことを忘れ、ツァーリに私について偽りを言った。このために、神はそなたを討ち、そなたを除き、そなたの住み家から移し、命ある者の地から根こそぎにされる。

主よ、しかし、あなたの名前のために、私は耐え忍ぶことにします。あなたの聖者たちのまえで私には至福が訪れるでしょう。久しい前から私には、キリストのために苦しみたいというつよい欲求がありました。だから、私がこのように苦患を受けるのを見て、私の救いのために喜びます。わたしたちの主なる神の御名において、私たちは大いなるものとなります。しかし、なぜ主よ、私の魂は悲しみに沈み、どうして私をかき乱すのですか。私の神に望みをかけよ。私はなお神に告白しよう。私の神は私に救いをもたらすであろう。」

このようにつねに涙にくれて神を讃えながら、昼にはいつも明るい朗らかな眼差しを自らの従士たちにそそぎ、甘い言葉で慰めた。彼らは、ミハイル公が少しも悲しまずにこう言うのを見た。「私の従士たちよ、おまえたちは心ひとつではなかったか。おまえたちはかつて鏡をのぞきこむように私をながめ、心慰められていた。いまや私が括りつけられた丸太を見て悲しみにくれ、嘆いている。だが、思い出すがよい、私たちが私たちの人生においてどうやって福を授かるのか。このことを私たちは耐え忍ぶことはできないのか。私の所業にくらべてこの苦患が何だというのか。私が許しを授かるには、私はこれ以上のことを耐え忍ばなくてはならないのだ。」ミハイル公は言葉を継いだ。それは義人ヨブの言葉であった。主はあたえ、主は奪う。主の御名はいまから永遠にほめたたえられよ[144]、と。「悲しむではない。しばらく時間がたてば、私の首にさらに別のことが起こるのを見るだろう。」

聖者は24日間をいわく言いがたい苦しみのなかですごした。自らの唇にコブラの毒をもった不敬なるカフガドゥイは、忍耐づよき公ミハイルの魂をふたたび憤らせようとして、辱められたこのようなすがたで彼を市のたつ場所につれてゆき、すべての債権者たちを集めて、ミハイル公を自らのまえに膝まづかせるように命じた。彼は権力を傘にきて正しい人のまえで尊大な態度をとり、正しい人におおくの侮辱の言葉を投げかけた。そのあと、彼は言った。「ミハイルよ、知るがよい、これがツァーリのもとでの習慣なのだ。もしも誰かがツァーリやその一族の方々の寵を失うと、その男にこのような丸太が縛りつけられるのだ。そして、ツァーリの怒りがおさまると、ふたたび当初の名誉が快復させられる。明日の朝、重荷はおまえからはずされるだろう。そのあと、いままで以上に敬意がはらわれるであろう。」彼を一瞥すると、見張りたちに言った。「どうしてこの丸太を軽くしてやらないのか？」彼らは言った。「あなたのご命令で、明日かその翌日までこのようにしているのです。」呪われた者は言った。「こいつのためにこの丸太をもってやれ。肩の重みが増さないように。」すると、彼の背後に立っていた者の一人が、この丸太をもちあげてささえてやった。

訊問には多くの時間がかかった。正しい人は訊問に答えた。このあと、カフガドゥイは聖なる人を外に連れ出すように命じた。カフガドゥイは彼を外に連れ出すと、自らの僕たちに言った。「椅子をもってこい。足を休ませたいのだ。よく働いたので、足が重くなったでな。」このときあらゆる民族の数知れぬ人々が集まってきて、彼の周りを取り囲んで立ち、聖なる人を見ていた。そうして立っていた者の一人が言った。「主人なる公よ、ごらんの通り、これだけ多くの人々があなたがみっともない格好をさらしているのを見ています。私たちは、あなたが自らの国を支配されていると聞きました。ご主人さま、あなた様はご自分のお国にお帰りになればよいのに。」聖なる人は涙を流しながら言った。「私たちは天使たちや人間たちの見世物なのだ。私を見る人はみな頭を振る[145]。」また、「彼を救ってもらうように主に頼んだ。主

が愛しておられるなら、助けてくださるだろう。私を母の胎から取り出したのは神、幼いころからの私の希望[146]。」

彼は立ちあがると、ほかの詩篇を歌いながら自分の天幕のほうに歩いていった。このときから、人々は彼のまなこに涙がいっぱい湛えられているのを見た。なぜなら、彼は心のなかで自分の死に際が醜くないようにと望んだからである。

聖なる公ミハイルは筆舌に尽くしがたい苦しみと忍耐のなかで26日を過ごした。テレク川をこえて、高くそびえるヤスィ、チェルカースィ山脈をすぎ、スヴェンツァ河畔、チュチャコヴィの町に近く、鉄の門[147]からほど遠くないところでのことであった。水曜日の朝早く、ミハイル公は朝祷歌、賛美歌、時祷歌を歌うように命じた。自身は泣きながら聖体礼儀の式規則を聞き、司祭にこの詩篇を歌ってくれるようにと言った。彼は司祭に書物をわたした。司祭は書物を受け取り、感動にくれ、たくさんため息をつき、涙をいっぱいためながら低い声で歌いはじめた。

司祭の目からは次から次へと涙がふきこぼれた。「神よ、守ってください。あなたを避けどころとする私を[148]。」詩篇2「主は羊飼い、私には何も欠けるところがない[149]。」詩篇3「私は主を信じる、それゆえに私は声を大にして言う[150]。」このあと、ミハイル公は自らの聴罪司祭に謙虚な気持ちで罪を告解し、自らの魂を清めた。ミハイル公とともに修道院長と二人の司祭がいた。このあとで彼の息子のコンスタンチンがあらわれた。ミハイル公は公と自らの息子たちに指示をあたえた。自らの領国、貴族、自らとともにいた者たち、下々の者たちにいたるまで克明に、面倒を見てやるように指示した。

それから、そのときが近づいてくると言った。「私に詩篇をわたしてくれ。なぜなら、私の魂がとても悲しがっているから。」聖なるお迎えが聖なる彼の魂を扉の向こうまで迎えにきていることに、彼は心のなかで感づいていた。書物を開くと、彼はこのような詩篇の文言を見出した。「神よ、私の祈りを聞いてください。私の祈りに耳を傾けてください。嘆きのなかで、悲しみのなかで、私は敵の声のために、罪人たちの迫害のためにうろたえています。なぜなら、この輩は憤って私に襲いかかるからです。」[151]

ちょうどこのとき、呪われたカフガドゥイはツァーリの御前に進みでて、聖なるミハイル殺害の命を受けた。ミハイルは「胸のなかで心はもだえ、私は死の恐怖に襲われています[152]」という句を読んだ。そして、司祭たちに言った。「父よ、この詩篇を読んでください。私にそれを言ってください。」彼らはこれ以上ミハイル公の心をかき乱すことを望まなかった。「ご主人さま、ご存知のとおり、この詩篇の最後には次のように言われております。あなたの悲しみを主にゆだねよ。主はあなたを支えてくださる。主は正しき者を支え、動揺しないようにはからってくださる[153]。」彼はふたたびこう言った。「誰かが鳩のように私に翼をあたえてくれるだろう。私は飛び去ってゆっくり休むことができる。ほら私ははるか遠くに逃れて荒れ野で夜を過ごす。私をお救いくださる神に望みをかけながら[154]。」

聖なるミハイル公がツァーリとともに狩りに連れだされたときに、彼の侍僕たちがミハイル公にくりかえし言った。「道案内と馬を用意してあります。山に逃げてください。生きながらえてください。」ミハイル公は言った。「神よ、私にそのようなことをさせないでください。これまで生きてきたなかで、私はそのようなことをしたことはない。私が自らの従士たちを見捨ててどこかに逃げ隠れしたなら、私はどんな賞賛を受けるというのだろう。神のお望みになるとおりになりますように。」そして、彼は言った。「もしも敵のカフガドゥイが私に罵言を吐くなら、私は罵言を耐え忍びもしよう。だが、私を憎悪するこの者は私に対して尊大な態度をとり、神から何の報いも受けてはいない。主よ、私はあなたに望みをかけます。」ミハイル公はこのように詩篇を歌い終えると、詩篇の書物を閉じて侍従にわたした。

ちょうどこのときであった。ひとりの彼の侍従が青ざめた顔色で声を押し殺して天幕のなかに飛び込んできた。「ご主人さま、ハーン国宮廷からカフガドゥイとユーリイ公が多くの人々を引き連れてまっすぐあなたの天幕に押し寄せてきます。」ミハイル公はただちに立ち上がり、ため息をついて言った。「私は何のために彼らが来るのか、知っている。私を殺すためにだ。」そして、彼は自らの息子のコンスタンチンをツァーリ妃のもとに遣わした。

兄弟たちよ、聖なるミハイル公を一目見ようと押しかけた多くの人々を見ることは恐ろしいことだった。カフガドゥイとユーリイ公は刺客を放ち、自分たちは馬にまたがって市のたつ場所に陣取っていた。というのは、市場はミハイル公の天幕から石を投げてとどく距離にあったからである。刺客たちは野獣のように、無慈悲な吸血鬼のように、聖なる人の従士たちを蹴散らし、天幕のなかへとなだれこみ、立ちすくんでいるミハイル公を見つけ出した。そして、彼の首につけられた棒枷をつかみ、手ひどく殴りつけ、彼を壁に打ちつけた。壁は崩れた。彼はふたたび逃げ出そうとしたが、多くのものにつかまれ、地面に投げつけられた。刺客たちは容赦なくミハイル公の足を打ちのめした。

すると、無法なる者たちのひとり、その名をロマネツという者が剣を引き抜き、聖なる人の右側のあばら骨に突き刺した。刺した剣を右に左に回しながら、彼の尊い咎なき心臓をえぐりだした。そして、このようにして偉大なるキリストを愛する公ミハイル・ヤロスラヴィチは、

11月22日水曜日、朝の七時、主の御手に自らの聖なる魂をゆだねたてまつり、自らの祖先、ボリスとグレープ、自らと同じ名前のチェルニーゴフ公ミハイルとともに聖者の列に加えられたのだった。

聖なる人の宮廷は、ルーシ人とタタール人に略奪され、ルーシ人の財産は陣屋へともち去られ、天幕はばらばらに壊されて、彼の聖なる遺骸は裸のまま放置され、誰にも顧みられなかった。彼らのひとりがいそいで市場に戻り、言った。「私たちはあなたがたに命令されたことをおこないました。」カフガドゥイとユーリイ公は馬にまたがり、すばやく聖なる人の遺骸のもとに駆けつけ、裸のまま放置されている聖なる人の遺骸を見た。カフガドゥイは激昂してユーリイ公を罵った。「この大公はおまえにとって父にも等しい人ではなかったか。なぜ彼の遺骸は裸のままうち捨てられているのか。」ユーリイ公は配下の者に、祖父の存命中から使っていた羽織一枚とマントをかけるように命じた。

そして、人々は大きな板にミハイル公の遺骸を載せて荷馬車に運びこみ、紐で堅く縛ってアデジという名前の川を越えた。アデジとは「悲嘆」という意味である。兄弟たちよ、自分たちの主人ミハイル・ヤロスラヴィチ公の惨めな死を目撃することは、私たちにとってまことの悲しみであった。私たちの従士たちのうち、彼らの手を逃れたものは少なかった。勇気を出してハーン国のツァーリ妃のもとに逃げた者もいたが、ほかの者たちは捕らえられ裸のまま引きずっていかれ、ならず者のように容赦なく打ち据えられた。連中の陣屋にしょっ引いていかれ、枷をはめられた。公や貴族たち自身が同じ天幕のなかで酒を飲み、誰がどのような罪を聖なる人に着せたかを話し合っていた。

おお、いとしいルーシの公たちよ、またたくまに過ぎ行くこの世の空しさに浮かれるのは止めよ。この世はクモの巣よりはやく行きすぎる。あなたたちはこの世に生まれるとき何ももってこなかったが、この世に別れをつげるときも、金も銀も高価な真珠ももってゆくことはできないのだ。まして町や権力を持ち去ることはできない。そのようなもののために、殺人まで犯したとしても。しかし、私たちは最初の話に戻ろう。起こった奇跡のことを物語ろう。

その夜、ユーリイ公は聖なる人の遺骸の見張りをさせるために自らの配下の者を遣わした。その者たちが聖なる人の遺骸を見張りはじめると、すさまじい恐怖と戦慄が彼らを捉え、いたたまれなくなって陣屋へと逃げこんできた。彼らが翌朝はやくやってきたが、板のうえに聖なる人の遺骸を見つけることができず、荷馬車がそこにあるだけで、板は紐で荷馬車に括りつけられていた。

聖なる人の遺骸は少しはなれたところに、傷が地面にむきだしに放置されてあり、傷からはたくさんの血が流れ出していた。右の腕は顔のしたに置かれ、左の手は傷を押さえていたが、衣服が着せかけられていた。なぜなら、主が自らの忠実なる僕ミハイルを輝かしくたたえ、かくのごとき奇跡を起こしたからである。夜じゅうずっと聖なる人の遺骸は地面に横たわっていたが、おびただしい数の獣も彼の遺骸には触れなかった。なぜなら、主は聖なる者たちのあらゆる骨を守られるからである。主は骨の一本も損なわれることがないように守ってくださるが、死は罪人には容赦がない。それが呪われた無法なるカフガドゥイの身におこったのである。カフガドゥイは半年もたたぬうちに自らの呪われた命を汚く投げ出し、永遠の苦しみを受けた。

多くの信心深い者たちが、そして、信仰のない一部の者たちも栄えある奇跡を見た。二つの明るい雲が一晩じゅう聖なる人の身体を守り、離れたりふたたびくっついたりしながら、太陽のように守っていた。翌朝彼らは言った。「この公は聖なるかな。罪もないのに殺された。この雲は天使が彼をお守りになっていることの徴である。」見た者たちは涙を流しながら、おおいに誓いを立てて、それがほんとうに起こったのだと私たちに打ち明けたのである。

そのあと、遺骸は貴族たち全員とともにムジャチャルイに送られた。その地で事の次第を聞きつけた、ミハイル公を知る格の高い商人たちが、敬意をもって高価な布地で聖なる人の遺骸をくるみ、ろうそくを灯しながら大いなる栄光をもって教会のなかに安置した。見張りとしてつけられた無慈悲な貴族たちは聖なる人の遺骸に会わせようとせず、聖なる人をおおいに辱めて見張りをつけて小屋に置かせた。しかし、主なる神はこの人をたたえたのである。この地に暮らしている、さまざまな民族の多くの人々が夜毎、地面から天にそびえる炎の柱を見た。また別に人々は、聖なる人の遺骸がおかれた小屋のうえに、弓なりにかかる空の虹を見た。

そして、そこから彼の遺骸はベズデジャに運ばれた。一行が町に近づくと、町の多くの人々が、聖なる人の橇のまわりにたくさんの人がろうそくをもって寄り添い、馬上では宙に明かりを掲げているのを見た。このようにして、遺骸は町に運ばれたが教会には安置されず、屋敷で見張りがつけられた。見張りの一人が聖なる人の遺骸の乗った橇を上にもちあげた。すると、何か目に見えない力が聖なる人の橇といっしょに彼を遠くに投げ飛ばした。彼は大いなる怖れとともにようやく立ち上がった。この男は存命で、私たちのもとにやってきて、そこにいた司祭に自分の身に起こったことを話したのである。私たちはこの男から話を聞き、書き留めた。

そして、そこから遺骸はルーシへと運ばれた。遺骸はルーシの町という町を運ばれてモスクワに到着し、慈愛深き救世主修道院の教会に安置された。ミハイル公の公

妃も彼の息子たちも起こったことを何も知らなかった。なぜなら、彼らの国は遠く、知らせる者とてなかったからである。

翌年、ユーリイ公がコンスタンチン公と彼の父の従士団を連れてルーシに到着した。ミハイル公の公妃アンナ、主教バルスノフェイ、その息子たちはこのことを聞きおよび、すべてを知るためにモスクワに遣いをやった。遣いに立った者が、キリストを愛する大公ミハイル公が殺されたことを知った。そして、人々は何日も何日も心慰むことなく泣きつづけた。

ユーリイ公がウラジーミルにいたとき、ドミートリイ公は自らの弟アレクサンドル公と自らの貴族たちを遣いにやり、ようやくのことで和議にこぎつけた。ユーリイ公は多くの銀をとり、聖なるミハイル公の遺骸をトヴェーリに返還することを命じた。モスクワに修道院長と長司祭とともに自らの貴族たちを派遣し、大いなる敬意をもって聖なる人の遺骸をトヴェーリに運んだ。ドミートリイ公、アレクサンドル公、ワシーリイ公、公妃アンナが平底舟に乗り、ヴォルガでミハイル公の遺骸を出迎えた。主教バルスノフェイは岸辺で十字架を携え、修道院長たち、司祭たち、輔祭たち、数限りない多くの民衆とともに遺骸を出迎えた。そして、泣き声があまり大きすぎて祈祷歌が聞こえず、人があまりにも集まりすぎて柩を教会まで運ぶことができなかったので、教会の門のまえに安置された。このようにして長いあいだ人々は泣いていたが、ようやく柩を教会のなかに運びいれ、埋葬の祈祷歌を歌い、遺骸をミハイル公自身が建立した聖救世主教会の右手、主教シメオンのわきの柩に安置した。大天使ミハイルの奇跡を記念する9月6日のことである。

見るがよい、神はさらに妙なるいわく言いがたい慈悲をもって奇跡を起こされたのである。はるかなかの国から聖なる人の遺骸は遠路をはるばる荷馬車と橇に乗って運ばれたのち、一年間モスクワにあった。ところが、その身体は何の傷もなく腐敗もまぬがれていたのである。聖なる公よ、私たちはどうしたらそなたをそれにふさわしく讃えることができるだろうか。[155]

注

1　宮野裕「ヤロスラフ賢公の教会規定：解説と試訳・訳注」、『北方人文研究』２、2009年、81－100頁。
2　БЛДР Т.I. С.480.
3　『ルカによる福音書』1章68－69節参照。
4　『詩篇』77章14－15節、72章18節。
5　『ペトロの手紙』一20章20節。
6　マムレはヘブロンにあった土地の名前（『創世記』13章18節、18章1節）。
7　『創世記』18章1－2節。
8　『ルカによる福音書』1章38節。
9　『創世記』21章8節。
10　『ルカによる福音書』3章23節。
11　『エフェソの信徒への手紙』1章10節。
12　『創世記』21章9節。『ガラテヤの信徒への手紙』4章30節。
13　『使徒言行録』6章1－15節。
14　『ローマの信徒への手紙』8章17節。
15　『使徒言行録』13章47節。
16　『創世記』48章13－16節。父イスラエル（ヤコブ）と再会したヨセフは、自らの息子たち（すなわちヤコブの孫）、マナセとエフライムをヤコブに祝福してもらおうとする。マナセが年上、エフライムが年下であったが、ヤコブはあえて長幼の順を無視してエフライムをマナセよりも上に立たせた。
17　『イザヤ書』42章9－10節。
18　『イザヤ書』65章15－16節。
19　古代イスラエル人の土地定着時代に活躍した軍事的英雄。旧約聖書『士師記』によれば、マナセ部族に属し、東方からラクダを使って襲撃してきた遊牧民の大軍に夜襲をかけて勝利した。凱旋後、王となるようにという人々の要請を断り、イスラエルのカリスマ的指導者（士師）の伝統への忠誠を示した。
20　『士師記』6章36－37節。
21　『士師記』6章39節。
22　『ヨハネによる福音書』4章21－24節。
23　『ヘブライ人への手紙』8章11節。預言とあるが、実際の引用は使徒書簡である。
24　『詩篇』77章14－15節。
25　『マタイによる福音書』21章44節。
26　『マタイによる福音書』15章24節。
27　『マタイによる福音書』5章17節。
28　『マタイによる福音書』21章41節。
29　『ヨハネによる福音書』3章19－20節。
30　『ルカによる福音書』19章42－44節。
31　あきらかにこの一節は紀元66年から73年にかけてのユダヤ蜂起の制圧の結果、エルサレムがローマ人によって破壊され（第1次ユダヤ戦争）、132年から135年の蜂起（第2次ユダヤ戦争）ののちに殲滅させられたことを念頭においている。この結果、ユダヤ人は国外へと追放された。
32　『マタイによる福音書』8章11－12節。
33　『マタイによる福音書』21章43節。
34　『マルコによる福音書』16章15－16節
35　『マタイによる福音書』28章19－20節。
36　『マタイによる福音書』9章17節。
37　『マタイによる福音書』9章17節。
38　『マラキ書』1章1－2節。
39　『イザヤ書』35章6－7節。
40　『イザヤ書』35章5節。
41　『ホセア書』2章20節。
42　『ヨハネによる福音書』20章28節。
43　『マタイによる福音書』28章13節。
44　『ヨハネによる福音書』6章62節。
45　『マタイによる福音書』16章16節。
46　『ヨハネによる福音書』20章28節。
47　『ルカによる福音書』23章42節。
48　『イザヤ書』52章10節。

49 『ローマの信徒への手紙』14章11節。『イザヤ書』45章23節。
50 『イザヤ書』40章４節。
51 『ダニエル書』７章14節。
52 『詩篇』67章４－５節。
53 『詩篇』47章２－３節。
54 『詩篇』47章７－９節。
55 『詩篇』66章４節。
56 『詩篇』117章１節。
57 『詩篇』113章３－４節。
58 『詩篇』48章11節。
59 『詩篇』65章６節。
60 『詩篇』67章３節。
61 『詩篇』148章11－13節。
62 『ヨハネによる福音書』３章５節。
63 『ガラテヤの信徒への手紙』３章27節。
64 『詩篇』69章29節、『フィリピの信徒への手紙』４章３節。『ヨハネの黙示録』３章５節、17章８節、20章12節、20章15節、21章27節、22章19節など。
65 『ヨハネによる福音書』20章29節。
66 『ダニエル書』４章24節。
67 『マタイによる福音書』５章７節。
68 『ヤコブの手紙』５章20節。
69 『マタイによる福音書』10章32節。
70 ヤロスラフ賢公のキリスト教名。
71 聖母マリアのこと。
72 『詩篇』79章13節。
73 『ルカによる福音書』12章32節。
74 『詩篇』130章３節。
75 『詩篇』12章２節。
76 第２ニカイア公会議ともいう。787年に小アジアのニカイアで開かれた公会議で、聖像破壊運動を否定し、聖画像の神聖さを肯定した。カトリックと正教の両方が認める最後の公会議である。
77 解説に述べたとおり、この作品は1037年から1050年にかけて書かれたと考えられる。当該の一節は、後代の挿入であろう。
78 ヴォロティスラフはヴラティスラフのこと。ヴラティスラフ（888ころ－921）はボリヴォイ公とその妻リュドミーラの２番目の子どもで、自らの兄スプィティグネフのあとを継ぎ、915年から921年にかけて統治をおこなった。
79 ヴラティスラフの妻で、ラテン語版のリュドミラ伝（『クリスティアーナの伝説』）によれば、ポラブ人のある部族、ストドラネ族ないしはリュティチ族の公の娘であった。
80 この出来事が正確にいつだったかはわからないが、906年か907年のことだと思われる。世俗の侯としての名であるヴャチェスラフが、新生児の洗礼にさいしてあたえられたとは思われない。別の写本で、ヴャチェスラフは聖エメラムに「誓いを立てている」ことから、これがこの侯のキリスト教名だったと見なす余地がある。ちなみに、聖エメラムはバイエルンのキリスト教化に功績のあった７世紀フランク族出身の殉教者。
81 一定年齢（６歳から８歳）に達すると侯（公）が髪を切る習慣は、東スラヴ人にも西スラヴ人にも知られている。
82 本翻訳の原文であるテクストの作成と注釈をおこなったＡ.Ａ.トゥリロフは、髪を切る儀式を行った司教の名ノタリイ（ノタリウス）を、ルミャンツェフ写本ではなく、暦年代記版とグラゴール文字のテクストに拠ったといっている（Библиотека литературы Древней Руси. Т.2. С.524）。ルミャンツェフ写本では、この箇所は«епископа етера»（「ある司教」）となっているだけである。
　ルミャンツェフ写本で司教の名が空白になっているのは、この時代のスラヴ世界でノタリイという名がほとんど知られていなかったために、写字生が名前を挙げるのをためらったのだとトゥリロフは考えている。
　しかしながら、ノタリイを10世紀前半の教会人と見なす見解は、ながいあいだ研究者を困惑させてきた。チェコは970年以前に独立した教会組織を持たず、バイエルンのレーゲンスブルグ司教区の司牧下にあったから、チェコの司教であるはずはない。この点を考えると、北イタリアのヴェローナ司教ノタリウス２世（在位915－928）を指すとする考え方が有力な説として浮上する。なぜ彼がプラハに来たのかは、次のように説明できる。
　司教ノタリウス２世はイタリア王ベレンガル２世（845ころ－924）の顧問官でもあり、一度ならず外交官の任務を託されて、その岳父で同盟者であるバイエルン伯アルヌルフ（850ころ－899）のもとを訪れた。アルヌルフの臣下には、チェコ人貴族が相当数存在した。ノタリウスにあたえられた使命は、サクソニアに対抗する軍事同盟の結成をめぐる一連の交渉であったと考えられる。ノタリウスの名が言及されていることから、ヴャチェスラフの髪切りの儀がおこなわれたのは、915年以降であると考えるべきである。
83 プラハにおける最古の教会であるが、現存しない。遺構は20世紀中葉に考古学発掘がおこなわれた。市の城門とヴャチェスラフによって建立された聖ヴィトゥス教会とのあいだに位置したと考えられる。東方正教会圏のテクストでは、聖母（生神女）の名「マリア」と呼ばれることはまれである。ここから、このテクストがローマ・カトリック文化圏と密接なかかわりをもっていたことがうかがわれる。
84 中世ロシア語原文では«литургия»で、本来、東方正教会における聖体拝領儀礼とその礼拝歌をさす。ラテン語で書かれたと考えられる原テクストでこの言葉は用いられていなかったはずであるから、このテクストはスラヴ語訳されてのちスラヴ語圏でかなり流布したものであったことがうかがえる。グラゴール文字写本のテクストでは、«Мьша»すなわち「ミサ」となっているが、こちらのほうがイタリアの司教が参加したこの儀式を表すのにふさわしい。«Мьша»という用語は、10－11世紀にかけてのグラゴール文字写本『キエフ断片』のなかにすでに見出される。
85 リュドミラ（860－921）は、エルベ川とサラ川（ザーレ川）のあいだ、チェコの北西部に居住していたポラビアのソルブ人の侯の娘で、ボリヴォイ侯の妻、ヴラティスラフの母。ラテン語で書かれた聖者伝（『クリスチアーナ伝』）によれば、リュドミラは夫とともに主教メトディウスから洗礼を受けたが、921年、その嫁にあたるドラゴミラ（ドラホミラ）によって絞殺された。年老いた公妃の受難は、聖者伝のテーマに取り上げられ、ラテン語やスラヴ語でテクストが編まれた。スラヴ語の完全なテクストは伝存していないが、暦聖者伝（プローグ）、ヴャチェスラフのスラヴ語聖者伝のもっとも古いヴァージョン（ヴォストコフ編纂本、ミネヤ編纂本）、公妃オリガの聖者伝に反映されている。
86 ブドゥチ（ブデチ）はプラハ北西の町。ヴャチェスラフ

がこの地に送られたのは、ラテン語を習得するためとされているが、«отсади»（配置される）という語が用いられていることから、少年はブドゥチとその周辺の土地を統治するためここに送られたと考えられる。この解釈は、ゲルマン部族法やビザンツ教会法において、統治者としての行為能力が法的に認められるのは13歳とされていたことからも正当化される。したがって、ヴャチェスラフが封土を得たのは、父の死の直前、920年か921年のことであろうと推測される。

87 ヴャチェスラフの弟で、その死後、967年に逝去するまでチェコを統治した。

88 ドラゴミラの統治は約2年つづいた。

89 ヴャチェスラフの姉妹のうち、一人の名前（プシブィスラヴァ、プリブィスラヴァ）のみが知られている。

90 トゥリロフによれば、ルミャンツェフ写本では、「B＝18（歳）」となっているが、これは明らかに誤りである。ヴャチェスラフの髪切りの儀式がおこなわれたのは915年以降であるから、921年に18歳であるはずがない。

　中世のスラヴ世界では、スラヴ語のアルファベット字母が数をあらわし、さらに古いグラゴール文字と新しいキリル文字とでは文字と数の対応がちがった。グラゴール文字で«B»は3を示したが、キリル文字では2であり、キリル文字で3は«Г»であった。

　誤りは2段階にわけて起こったと、トゥリロフは推測する。古いグラゴール文字の写本で3＝«B»は、キリル文字に転写するさい«Г»となるはずであったが、写字生は字母を適切に«B»から«Г»に変換させず、キリル文字の写本でも2を意味する«B»のままに残した。これが第1の誤りである。さらにこのキリル文字の写本で第2の誤りが起こる。3をしめす«B»と8をしめす«И»のかたちの類似から、両者が入れ替わり、3が8になったとするのである。

91 『エフェソの信徒への手紙』6章2節。『マタイによる福音書』19章19節。

92 『使徒行伝』7章60節。

93 『詩篇』25章7節。

94 『マタイによる福音書』25章35節。

95 4世紀初頭、ディオクレティアヌス帝時代に12歳で殉教した少年殉教者（『黄金伝説　2』、人文書院、1984年、290－295頁）。記念日は6月15日。ヴャチェスラフ侯統治下のプラハで崇敬がはじまり、プラハの守護聖人となった。

96 聖エメラムは8世紀バイエルンの司教、宣教師、殉教者で、920年代にチェコが属していたレーゲンスブルグ司教区の守護聖人となった。記念日は9月22日。チェコで聖ヴィトゥスへの崇敬がさかんになる以前に、エメラムはもっとも崇敬を集めた聖者の一人であり、ヴラティスラフは自らの長男の洗礼にさいして洗礼名をエメラムとしたのだった。

97 ボレスラフの町の意で、プラハの北西に位置する、現在のスタラ・ボレスラヴァをさすと考えられる。10世紀には、この町の付近にチェコ侯国の国境があった。ボレスラヴリはボレスラフ自身によって創建されたか、次男ボレスラフの誕生を祝ってその父ヴラティスラフによって建てられたと考えられる。

98 コスマスとダミアヌスは、ディオクレティアヌス帝の大迫害のときに殉教した、医業や牧畜、鍛冶業の守護聖人（『黄金伝説　3』、人文書院、1986年、478－484頁）。ロシア正教会では、同じ名前の3組の聖人が知られ、記念日が7月1日、10月17日、11月1日の三つある。ローマ・カトリックでは、9月27日である。

99 『ルカによる福音書』23章46節。

100 『詩篇』51章5－6節。

101 東方正教会のイコノグラフィーの一つで、中央にキリストを置き、その右手に聖母を左手に洗礼者ヨハネを配置する画像。一般的にイコノスタス（会衆席と至聖所を隔てる壁）にもうけられた扉（王門）のうえに備えられる。

102 教会建築の用語。方形の土台部分に丸屋根を設置するとき、丸屋根の重量を支えるために、方形の土台部分の四隅に三角形の壁面をつくる。パンダンティーフは緩やかに湾曲したこの壁面をさし、この部分には四福音書作者の聖画像が配されることが多い。

103 『マタイによる福音書』10章42節。「私の弟子だという理由で、この小さい者の一人に、冷たい水一杯でも飲ませてくれる人は、必ずその報いを受ける。」

104 『ヨハネによる福音書』15章13節。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」

105 ヤスィ族とは、北カフカスに居住する、現在のオセチア人の中世ロシア語名。

106 アンドレイ公はカマ川がヴォルガ川に流れこむあたりに居住するヴォルガ・ブルガール族に遠征を行い、戦いを優勢に進めていた。

107 「律法は怒りを招くものであり、律法のないところに違反もありません。」（『ローマの信徒への手紙』4章15節）

108 ミクーラは聖母出現の奇跡を演出したのであろう。

109 「人々に、次のことを思い起こさせなさい。支配者や権威者に服し、これに従い、すべての善い業を行う用意がなければならないことを。」（『テトスへの手紙』3章1－2節）

110 6世紀ビザンツ帝国の文筆家アガペトゥスがユスティニアヌス帝へ捧げた、72章からなる『提言 Ekthesis』の21章にはつぎのような言葉がある。「その肉体的本質において、皇帝はあらゆる人間と同質であるが、その位階の力において、すべての人間に君臨する神に似ている。」（*Agapetus*, Advice to the Emperor. Three Political Voices from the Age of Justinian. Liverpool University Press. 2009. P107.）

111 「実際、支配者は、善を行う者にはそうではないが、悪を行う者には恐ろしい存在です。あなたは権威者を恐れないことを願っている。それなら、善を行いなさい。そうすれば、権威者からほめられるでしょう。権威者は、あなたに善を行なわせるために、神に仕えるものなのです。しかし、もし悪を行えば恐れなくてはなりません。権威者はいたずらに剣を帯びているのではなく、神に仕える者として、悪を行う者に怒りをもって報いるのである。」（『ローマの信徒への手紙』3章3－4節）

112 ウラジーミルの東地区の石造りの門のこと。

113 「主は愛する者を鍛え、子として受け入れる者をみな皆、鞭打たれるからである。あなたがたは、これを鍛錬として忍耐しなさい。神はあなたがたを子として取り扱っておられます。」（『ヘブライ人への手紙』12章6－7節）

114 ロマンはボリスの、ダヴィドはグレープのキリスト教名。ボリスとグレープについては、「中世ロシア文学図書館（II）聖ボリスと聖グレープにまつわる物語」（『電気通信大学紀要』第23巻、2011年）参照。

115 「中世ロシア文学図書館（II）聖ボリスと聖グレープに

まつわる物語」（『電気通信大学紀要』第23巻、2011年）に、『聖ボリスと聖グレープに捧げる物語』、『奇跡についての物語』、『聖ボリスと聖グレープにかんする講話』が訳注とともに日本語訳されている。

116「中世ロシア文学図書館（I）モンゴル・タタールのくびき」（『電気通信大学紀要』第23巻、2011年）に、『チェルニーゴフ公ミハイルとその貴族フェオドルのハーン宮廷における殺害の物語』が訳注とともに日本語訳されている。

117 *Кучкин В.А.* Повести о Михаиле Тверском. Историко-текстологическое исследование. М., 1974.

118 事件発生の年の記述はあきらかに誤りである。この年は、事件が起こった年とも、テクストが書かれた年とも関係がない。事件は正確には1318年に起こっている。

119『ヨハネによる福音書』13章15節。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」

120『使徒言行録』2章1－13節。

121 キエフ大公で、988年キリスト教を受けいれ、キリスト教をルーシの国教とさだめた。

122 イシュマエルは、アブラハムと女奴隷ハガルとのあいだに生まれた子で、中世ロシアでは、イシュマエルの子孫とはふつうイスラム教徒、ことにタタール勢力を指していた。

123 モンゴル・タールの襲来以降、中世ロシアにおいて、皇帝（ツァーリ）とは金帳汗国のハーンを指していた。

124 34年という数字は、1237年のモンゴル・タタールの来寇から1271年のミハイル公の誕生までの歳月を指していると考えられる。

125 ヤロスラフ・ヤロスラヴィチは1220年代後半から1230年代初めにかけて生まれ、1255年からトヴェーリ公、1263年からウラジーミル大公に即き、1271年に死んだ。

126 ヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ（1190－1245）は、ヤロスラフ・ヤロスラヴィチの父で、フセヴォロド大巣公の息子。1238年からウラジーミル大公だった。

127 ヤロスラフ・ヤロスラヴィチの二人目の妻で、ノヴゴロドの貴族ユーリイ・ミハイロヴィチの娘。

128 アレクサンドル・ネフスキイ（1220ころ－1263）の子で、ゴロジェツとコストロマーの公、1294年からウラジーミル大公。ミハイル・ヤロスラヴィチの従兄弟。

129 モスクワ大公ユーリィ・ダニーロヴィチがライヴァルだった。

130 ローマ皇帝（在位79－81）。ウェスパシアヌスの長子で、紀元70年、エルサレムを陥落させた。

131 暴君として有名だったビザンツ皇帝フォーカス（在位602－610）のこと。ユスティニアヌス1世没後の混乱のなか、602年、兵士たちの盾にのせられてコンスタンティノープルにせまり、マウリキオス帝を殺して即位したが、その恐怖政治はカルタゴ総督ヘラクレイオスによって終焉を迎えた。フォーカスは610年に処刑された。

132 コンスタンティノープルのこと。

133『詩篇』91章7節。

134『詩篇』91章10－12節。

135 ヴァルスノフィイは1315年から1328年までトヴェーリ主教だった。

136 修道院長イワンにかんする正確な情報はない。『トヴェーリ公ミハイル伝』について包括的研究をおこなったクチキンの仮説によれば、ここで書かれたイワンは、トヴェーリの聖フョードル・チロン、フョードル・ストラチラト修道院の院長、ツァリグラード（コンスタンチノープル）人ヨハネスであり、このヨハネスはネルリ川畔までミハイル公を見送った。ネルリ川畔には修道院はなかった。

137『イザヤ書』3章1－4節。引用が正確であるとはまったくいえないし、文言の解釈も本来の聖書のテクストからずれている。これは『トヴェーリ公ミハイル伝』の作者が直接旧約聖書からではなく、年代記の「ボリスとグレープ殺害の物語」などほかのテクストから引用をおこなったためであると考えられている。

138 モスクワ公ユーリイ・ダニーロヴィチの妻コンチャカ（降嫁後正教の洗礼を受けてアガーフィヤ）はウズベク・ハーンの妹で、1318年、トヴェーリでミハイル公に囚われの身であったときに死んだ。彼女はミハイル公によって毒殺されたという噂がささやかれていた。

139『詩篇』115章5－7節。

140 アレクサンドルはトヴェーリ・オトローク修道院の院長で、『トヴェーリ公ミハイル伝』の著者と考えられている。

141『詩篇』102章1－4節。

142『詩篇』69章2－5節。

143『詩篇』52章3－7節。

144『ヨブ記』1章21節。

145『詩篇』22章7－8節。

146『詩篇』22章9－10節。

147 ダリヤリ峠のこと。

148『詩篇』16章1節。

149『詩篇』23章1節。

150『詩篇』116章1節。

151『詩篇』55章2－4節。

152『詩篇』55章5節。

153『詩篇』55章23節。

154『詩篇』55章7－9節。

155 物語の末尾は残されていない。途中で終わっているように思われる。